



SRI SATHYA SAI RAM NEWS

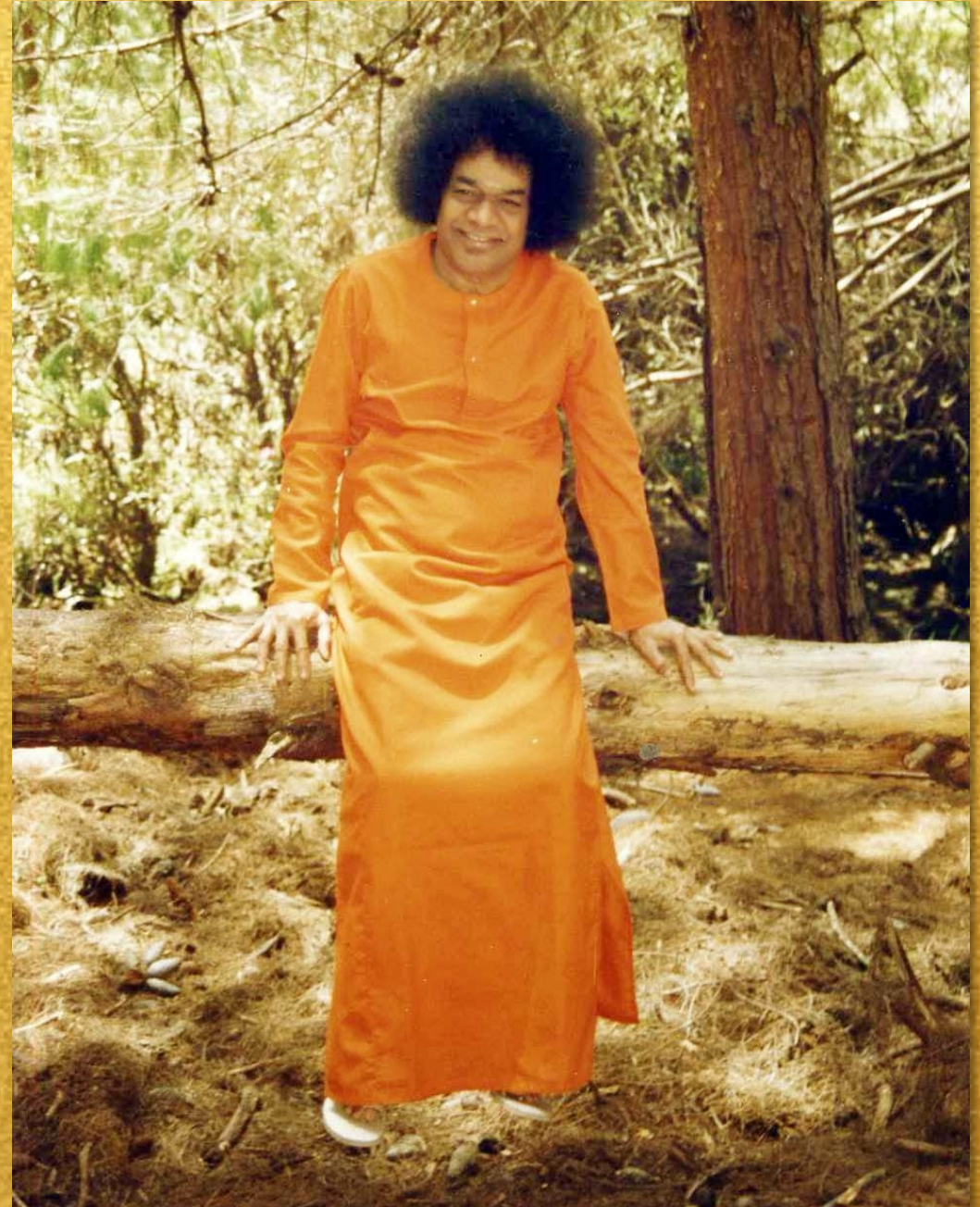
LOVE ALL SERVE ALL HELP EVER HURT NEVER

No.210 / 10月号 / 2022



CONTENTS

- サイの御教え
 - 「自立心と神への信心を養いなさい」
 - 「一息ごとに断言しなさい」
- Sri Sathya Sai Baba 様ご生誕100周年記念ヴィジョン
「人生の旅の荷物」
- サッティヤム・シヴァム・スンドラム
- 帰依者インタビュー「私の旅」(第7回)
- サイと共に
- 帰依者体験談
- ワカ チンナ カタ
- 活動報告1：インドフェア神戸
- 活動報告2：神戸サイセンター
- 活動報告3：スタディーサークル





サイの御教え

1997年ヴィジャヤダシャミー
のババの御講話

自立心と神への信心を
養いなさい



古来、バーラタ〔インド〕は、霊性に立脚することによって平安と繁栄というメッセージを世界に伝えてきました。国民は常にすべての国の幸福を祈ってきました。バーラタ文化の偉大さは、その壮大さを体験した人だけが理解できるものです。バーラタ文化は、歴史の激動を乗り越えて試練に耐えてきた文化です。バーラタ文化の偉大さは、サナータナダルマ（古来永遠の人生哲学）に反映されています。正義はこの哲学の外的な現れです。正義が人間の生活を律してこそ、平等、友愛、自由といった理想が実際に実現されるのです。

人々が感官をコントロールすることを学んだとき、世の中の対立や不和はなくなるでしょう。現代のバーラタ人は、インド文化の深遠な真理を無視しています。それは人々が私利私欲を追求し、利己心に振り回されて、本来持っている神性を忘れているからです。他者に対して親切で思いやりがあるという、人間としての自然な傾向をきちんと育むべきです。現代人はそれをしていません。

創造の神秘を理解しなさい

基本的には、人と自然の間に対立はありません。赤ちゃんには母乳を飲む資格があるように、蜂には花の蜜を吸う資格があるように、人には自然の果実を味わう資格があります。創造世界は人類よりも偉

大です。創造世界の神秘を理解することは人間の特権です。さらに、人は創造世界と創造主の関係を知る努力もすべきです。

人体は、目や鼻や手や脚といった異なる器官で構成されています。人間は人間社会の手足であり、人間社会は人類の手足です。人類はプラクリティ（自然）の手足であり、プラクリティはパラマートマ（普遍なる大我）の手足です。こうした連鎖関係について考えるなら、人間は究極の至福の権化と結び付いているということがわかります。

しかし、なぜその至福は、とらえようとする人々の手から逃げていってしまうのでしょうか？ それは、人が自分に内在する神性を認識していないからです。人は、自然というものはもっぱら人間が享受するために神が創造したものだと思っています。それは間違っています。自然は人間が、一定の限度内で、享受するためにあります。

現代の科学者たちは、無制限に自然を享受することを念頭において、自然の力を探っています。科学者たちは、自然のあらゆる力を人間のコントロール下に置いて、制限なしに享受したいと欲しています。今、私たちが目にしている非常に多くの自然災害は、それが原因です。

世界中で起きている干ばつや洪水の原因は何でしょう？ 人は、抑制も規制もなしに自然の恩恵を享受しようとして、墓穴を掘っています。ここに地球儀があるとします。片側を叩けばバランスが乱れます。天然資源を用いるときには、きちんとバランスが保たれるよう、常に細心の注意を払うべきです。一方を過剰に用いるなら、他方に害をもたらすことになります。

天然資源の開発に際し、人々は権利という名の下に、限度を守らず、自分たちのやりたいようにやっています。私には、その「権利」という言葉がどこから来たのか、理解できません。実のところ、「権利」といったようなものは存在しません。実際、人々が持っているものは「責任」です。人が自分の責任をきちんと果たすなら、そこから何がしかの権利が生じることは可能です。もし責任を無視するなら、その結果はどうなるでしょう？ 混乱と平安の欠如しかありません。雨が降ると水路に水が流れます。雨が降らないとき、どうして水を望むことができるのでしょうか？ ですから、まず雨が降るように祈ることです。そうして初めて、あなたは川の水の流れを享受することができます。同じように、まず自分の義務を果たすことです。そうすれば、自分の権利を確保することができるでしょう。

義務は最も神聖なもの

今、誰もが権利ばかりを口にします。これは全く意味のないことに見えます。人は皆どのように一日を過ごしているか、しばし考えてごらんください。朝起きてから寝る時まで、誰もが何らかの心配事を抱えています。時間は神聖なものです。行動はさらに神聖なものです。義務は最も神聖なものです。活動によって何かを成し遂げるだけでは不十分です。人生の最後の最後まで、着手したことすべてにおいて成功を収めなければなりません。チャンドラバブ・ナイドゥ首相〔アーンドラ・プラデーシュ州首相〕がスピーチの中で述べたように、人々はすべての行いを理想的な形で行わなければなりません。単に機械的に存在しているだけでは、人間性を表現することはできません。人として生まれるのは計り知れないほど貴重なことです。真の人間の証として、3つのことを守らなければなりません。それは、罪への恐れ、神への愛、社会における道徳です。罪深い行為は慎むべきです。サンスクリット語の格言に、「人は徳行の果報を欲しながら、罪深い行いにふけている」というものがあります。思考と言葉と行いの清らかさを身につけたとき、人は善行の果報を得ることができるでしょう。

人としての生は、生まれてから死ぬまで、さまざまに悩みに満ちています。それらの悩みから解放される唯一の方法は、心を神に向け、いつも神のことを考えていることです。

さらに、人は自立心を養わなければなりません。自分でできることを人や政府に頼ってはいけません。自分のことはできるだけ自分でして、その労働の果報を享受しなさい。

神の助けを求める前に、自分の能力を使いなさい

現代人の多くは、自分に自信がなく、自分が望んだことを成し遂げる決意も持っていません。そして、必要な努力もせずに、すぐに結果を出したいと思っています。どうしてそうなのでしょう？ 神や政府に責任を負わせるのは適切なことではありません。神は間違いなく助けることができますが、神に助けを求める前に、あなたが神から授かっている力と才能を使うことを神は期待しています。神から与えられた能力を最大限に活用することをせずに神に頼るのは、誤った判断です。

自分たちが住んでいる環境を浄化するよう努めなさい。どこにも平和や調和がありません。帰依者は愛を育み、人間的価値を実践することによって、そうした空気を浄化し、聖化するように努めなさい。帰依者たちは、さる方面からの反対や不賛成に遭うかもしれません。そうした障害は克服すべきです。そのような批判をする人たちは、極めて価値のあるものを破壊する害虫のようなものです。

福祉活動に従事する人たちは、そのような批判を気にすることなく、良心の指示に従って善い行いを続けていくべきです。この点については、州首相も述べています。自分は人々のためになることをやっているのだと確信しているとき、どうして小心者の批判を気にする必要がありますか？ 自信を持ちなさい。

今日、バーラタでは何百万人もの人々が飲み水の不足に悩まされています。この問題は、ある程度、人々自身の行動に原因があります。人々はどこまで正しい行動をとっているのでしょうか？

人の振る舞いには、神の振る舞い、人間の振る舞い、獣の振る舞いという3つの種類があります。私たちは、獣性の増大と人間性の衰退を目にしています。この傾向の原因は、欲望が際限なく膨らみ、アーシャヤール（理想）が確実に消滅していることです。利己心が拡大し、無私が減少しています。策略が蔓延（まんえん）し、誠実さが消え、体への執着が増し、国への愛が薄らいでいます。その結果、国民の人格がどんどん卑しくなっています。

犠牲は幸福の真の秘訣

古代の人々が生きていた古き良き時代の物事の状態は、どれほど違っていたことでしょうか。彼らは善

良な帰依者たちとの交流を喜び、貧しい困窮した人が家に来るのを歓迎し、神を讃える賛歌を聞くことを好みました。彼らは、そういったことがあった日だけを神聖な日と見なしました。人生はこうした高潔な生き方によってのみ救済されるのです。

古代のバーラタ人は、犠牲の質を高く評価し、正しさを崇め、正義を最高の美德とし、真理を大切な友として迎え入れました。今日の物事の状況は、これらすべてと食い違っています。

幸せの真の秘訣は犠牲です。誰もが自分の能力の範囲内で収入と財産を他の人々に分け与え、他の人々の幸せに貢献すべきです。貧困にあえぎ、さまざまな形で苦しんでいる人がたくさんいます。そのような不幸な人たちを助けに行くのは、裕福な人の義務です。

自分の言葉どおりに生きなさい

愛の化身たちよ！ 今日、皆さんは多くのリーダーのスピーチを聴きました。彼らは心から語り、人々の福祉に対する懸念を表明しました。もしそれらの言葉が意味のある行動に移されれば、この国は必ずや良い方向に向かうでしょう。このような機会に、こうしたリーダーたちが前に出て、この種の保証をするというのは、歓迎すべき兆しです。それらは国

民に熱意と自信を与えるに違いありません。州首相、カルナータカ州議会議長、連邦大臣は、いずれも信念と熱意を持って発言しました。このことは、人々のハートに刻み込まれるはずです。保証は行動に移されるべきです。

バーラタだけでなく、世界の他の地域も、無数の問題に悩まされています。その解決策は何でしょう？ 人の心を根本から変える必要があります。人々は人間に生来備わっている神性を認識すべきです。この心の変容と神性の認識が同時に起こったとき、人類の神格化があるでしょう。

愛の化身たちよ！ 5日から始まったこのヤグニャも今日で終わりです。今日はヴィジャヤダシャミーの日〔勝利の十日目という意味のダシャラー祭の最終日〕です。今日、飲料水プロジェクト〔恵みの水〕がアーンドラ・プラデーシュ州政府に移管され、州首相がこの事業を適切に維持する責任を引き受けたことは、おめでたい兆しです。国民のために実施しなければならない同様の福祉計画は、まだまだたくさんあります。私は、頭のとっぺんから足のつま先まで、全身全霊で人々への奉仕に尽くしています。私は、人々のためになる多くのことを行いたいと考えています。私は、それらについて話したくはありません。行動がそれを語るなければなりません。州議会議長は、自分の県でも飲料水の問題が深刻であ

ることに言及しました。他の県と違って、コーラール県には川がありません。こうした問題を解決するために、誰もが自分の力を発揮することを決意すべきです。誰もが社会に恩があるのですから、誰もが社会に対する自分の責務を自覚すべきです。必要であればいつでも、自分たちの問題を解決するために集まって協力し合うべきです。

多くの若者が家で時間を無駄にしています。そのエネルギーを建設的な福祉活動に集結させるべきです。州首相は、シュラマダーン（労働力を贈る）という案に言及しました。村の誰もが、他人の助けを待たずに村の道路を建設するために、そうしたシュラマダーンに参加すべきです。できるだけ多くの村人たちの必要を満たすために、この種の自発的な協力活動を行うべきです。必要なときには他人の助けを求めてもかまいません。

全力を傾けて助けるというバガヴァンの保証

私は、どの村から来る人も、どの州から来る人も、どの共同体から来る人も、助ける用意ができています。私はどんな類の差別も心に抱きません。あなた方が信じようと信じまいと、私は、ただ一つのカースト——人類というカースト、ただ一つの宗教——愛という宗教、ただ一つの言語——ハートという言語を敬っています。私の助けを求める人には、私は

その人がどのカーストであろうと、どの宗教であろうと、どんな信条であろうと、決して誰にも「ノー」(No)とは言いません。多くの帰依者がここに集まっています。私は、あなた方の要望に応えるためなら、プラシャーンティ・ニラヤムを手放す覚悟さえあります。私は人々のためになら何でもする覚悟があります。それが私の唯一の関心事です。私は、人々を主の恩寵を受けるに値するようになるためだけに働いています。この事実を認識している人はほとんどいません。何年も私の所に通っている人たちでさえ、この真実を認識していません。神のやり方について、真実を理解するのは難しいことです。

あなた方は皆、神への信心を持って自分の義務に精を出すべきです。そうすれば、すべてが上手くいくでしょう。万事、容易に達成することができるでしょう。これは、私たちの古代の人々が追求した道です。当時は、政党も派閥争いもありませんでした。すべての人が心一つにして行動していました。それは「ヴェーダ」のメッセージです。「共に働き、共に楽しみ、互いを愛し、皆と喜びを分かち合おう」——これはリグ・ヴェーダの輝かしいメッセージです。人々はヴェーダの教えを基に生活していました。こうした訓戒が尊重されない今、どうやって人としての生が神聖であることができるでしょうか？

あなたのハートが善良なら、あなたに害は及ばない

自分の良心に従って正しいことをしていれば、他人の言うこと、考えることを恐れる必要はありません。勇気は善行と共にあるべきです。あなたのハートが善良なら、あなたに害は及びません。

私は、アナンタプル県〔アナンタプラム県〕以外にも、いくつかの県の必要に応えたいと考えています。その中で、私は一つのことを保証したいと思います。バーラタであれ他のどの国であれ、福祉計画を実行するための財源が不足することはありません。財源は豊富にあります。ただ、そうした計画を実行しようという強い気持ちがないだけです。強い気持ちがあれば、どんなことでも達成することができます。人々は、月へは行けるのに、自分のハートに旅をすることはできないのでしょうか？

私が飲料水プロジェクトを始めた時、トラストのメンバーたちは私にこう言いました。「スワミ！トラストには十分な資金がありません。私たちはどうやってこの巨大プロジェクトに乗り出せばいいのでしょうか？」。私は彼らに請け合いました。「それは私の仕事です。私がこの善良なプロジェクトの完遂を見届けます」。それは何の障害もなく達成されました。

バーラタには、まだ為されるべきことがたくさん残っています。カルナータカ州議会議長が述べたように、水は国中で第一に必要なとされているものです。きれいな飲料水が全国民に行き届くようにしなければなりません。それが私の決意です。

私は、早い時期から国民に3つの必需品を提供することを気にかけてきました。無償の教育、無償の医療、そして、飲料水といった基本的な設備の提供です。教育は頭のため、医療はハートのため、きれいな水は体のためです。この3つは、生活に必要なとされる主なものをカバーしています。この3つを提供することは最も大きな満足感を与えてくれます。

リーダーたちに課せられた課題

どこでもあなた方ができる所で、教育を無償で提供しよう努めなさい。貧しい人々のために無料で薬や治療を提供しなさい。飲み水を提供するために、あなた方の間で可能なかぎり協力し合いなさい。ラーヤラシーマ地方では、人々がフッ素症の弊害に苦しんでいます。どうか、少なくともこれからの世代がこれらの病気から救われるよう取り計らってください。私はあなた方全員を祝福し、あなた方のすべての有益な活動において私の恩寵があることを保証します。福祉プログラムを実行するためにすべての関係当局が協調して行動することを、私は望みます。

す。

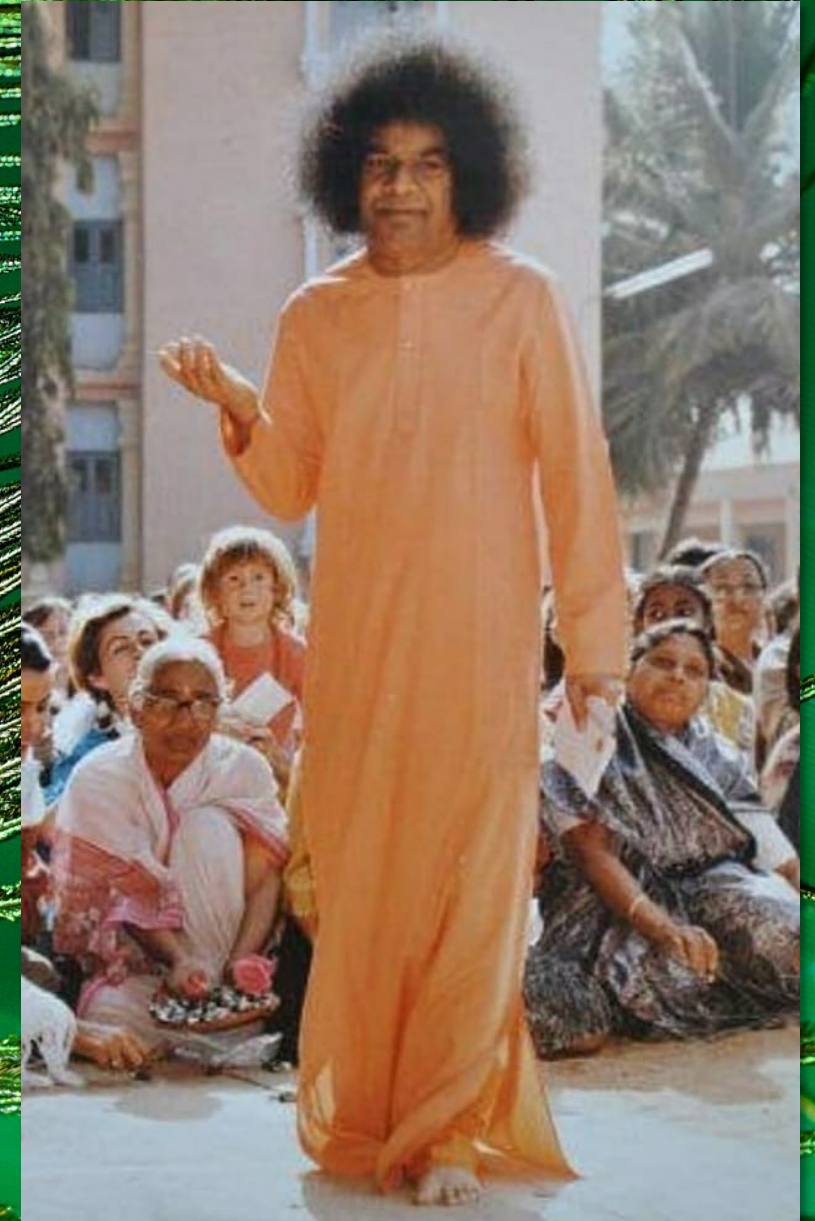
長い間ここに来ることを切望していた州首相が、今日という縁起の良い記念すべき機会にここにいるのは幸運なことです。私は彼が自分のプログラムをしっかりと遂行してくれると確信しています。私は彼が将来におけるこの計画〔飲料水の提供〕の維持に対する責任を引き受けてくれたことを嬉しく思います。彼は部外者ではありません。実際、名前や姿は違っても、霊的には皆一つです。彼が引き受けてくれたことで、私たちは重い責務から解放されました。今後、私は新たな重荷を背負うことになるかもしれません。その用意は十分にできています。物語はこれで終わりではありません。

私はコーラル島の人々が必要としていることを、近い将来実現することを保証します。72歳の誕生日までに、コーラル島の人々の飲料水の必要は満たされ、どの村の人々にも十分に届けられるようになるでしょう。アナンタプル島でさえ、まだ届いていない地域があります。私は、残りもすべて遂行させると断言します。もしカバーされていない地域があるなら、私に知らせてくれれば遂行させるつもりです。私はあなた方のものであり、あなた方は私のものです。私たちの関係は霊的な関係です。あなた方には私に近づく権利があり、私にはあなた方の希望に応える義務があります。この点に関して、いか

なる疑いも抱いてはなりません。私はあなた方全員を祝福します。

1997年10月11日

ダシャラー祭ヴィジャヤダシャミー
プラシャーンティ ニラヤムの
サイクルワント ホールにて
Sathya Sai Speaks Vol.30 C29





サイの御教え

1969年ダシャラー祭の
ババの御講話 5

一息ごとに
断言しなさい



シャーストリ〔学者〕は、叙事詩や歴史からの例を挙げて、人間の状況への時間の力と影響について皆さんに説明しました。今日は良いことでも明日には悪いことになり、今日実行可能なことでも明日には実行不可能なことになる場合があります。時間は、習慣や風習を時代遅れなものや時代錯誤なものにします。今日悲しみを与えるものは、明日には喜びをもたらすかもしれません。子供にとって学校に行くのは嫌なことです。後になれば、自分が年若い時分に無理やり授業を受けさせられたことに感謝します！ ラーマが追放された時、シーターは、アヨーディヤーの都も、宮殿も、自分が持っていた幸せな夢の数々も、すべてを捨てて、森に付いて行きました。けれども、金色の鹿を見て、隠れていた欲望が呼び覚まされて、世俗的なものへの「執着」が生じ、その結果、一連の災難に見舞われることになりました。時間がシーターのハートの中にあつた欲望の根を温存させていたのです。

ラーマヤナは、もう一つの教訓も説いています。シーターを探すことは、体験の場における真我顕現の秘訣を象徴しています。ラーマは、シーターを取り戻した時、体験によって裏づけられた真我顕現の英知を取り戻しました。グニャーナ〔英知〕はアヌバーヴァ グニャーナ〔体験から生まれた英知〕となりました。ラーマヤナは、人

が真我顕現という尊い目標を切望しているときには、自然界のすべての力、すべての創造物がある人を助け、あらゆる援助をしてくれるということを教えています。猿、鳥、リス、さらには、石ころや岩までもが、その困難な務めにおける同志となりました。高みを目指し、最高の冒険をしようと決意しなさい。そうすれば、すべてが整い、あなたをゴールへと導いてくれるでしょう。

世界は3つのグナの複合体

実のところ、あなたはその冒険へと向かうよう、あなたの呼吸に促されているのです。呼吸は、1日に21,600回も「ソー ハム」(神 - 私) [私は神であるという意味の音] を繰り返して、宇宙に内在する原理と体に宿る者の同一性を強調しています。あなたは、口では「神はいない」と断言しているかもしれませんが、息が入ってくる時に「ソー」[神である]、出ていく時に「ハム」[私は] と繰り返して、不変の存在である「神」は常駐している「私」[自分] である、ということを確認しているのです！

インドの聖賢たちが日常生活に課した規制や制限、衝動や態度を制御して方向付けるために推奨したあらゆる処方箋は、インド文化の貴重な要素であり、大切に、実践すべきものです。この世は3つのグナ(属性)——サーットウィカ[浄性]・ラージャ

スィカ[激性]・ターマスィカ[鈍性]——の複合体です。

ウパニシャッドは、この3つのグナに絡め取られている人たちに、雷が「ダ、ダ、ダ」[雷の音] といって「ダヤー」・「ダマ」・「ダルマ」という3つの教訓を教えていると述べています。アーナンダ(至福)を渴望するサーットウィカ[浄性]の人には「ダマ」(自制心)を、冒険、英雄、活動を渴望するラージャスィカ[激性]の人には「ダルマ」(正しい行動、正義の理想)を、そして、感覚に執着して客観的な快楽を渴望するようなターマスィカ[鈍性]の資質に支配されている人には「ダヤー」(愛に基づく慈悲。これは執着と貪欲を昇華させることができる)を、教えているのです。

賢者たちは、「タット トワム アスィ」(汝はあれである) [タットワマスィ、汝はそれなり] という真理を発見しました。「あれ」は「神」であり、そこからすべてのものが生まれ、そこにすべてのものが在り、そこに一切が融合します。この真理は、バクティ マールガ[信愛の道]——真我への献身、信愛、全託の道——によって知ることができます。「汝」つまり「個人」は、カルマ マールガ——無私の行い、すべての行いの果報を放棄する道、尊崇の精神を持ってすべての行いを礼拝の行為として真摯に行う道——によって理解することができます。

そして、「タット」(あれ)と「トワム」(汝)を同一視していく「アスィ」と呼ばれるプロセスは、グニャーナ マールガ[英知の道]——知恵の道、鋭く執拗(しつよう)な識別の道——によって完結しなければなりません。バクティとカルマ[行為]が結合すると、それはグニャーナへとつながっていきます。バクティはすべてのものを「タット」[神]と見ます。カルマ[行為]は「トワム」[汝]の分離性を消し去ります。そのため、「アスィ」(同一視)のプロセスは容易になるのです。

貧しい人に奉仕することでエゴをなくす

こうしたことはすべて単純なことで、さまざまな聖句によって説明されていて、それを著名な師が毎日何千という人々に説明していますが、真理は経験されておらず、自己同一視は味わわれていません。一切が舞台上の演技です。言葉はハートからのものではなく、他人が書いた台本の合図に従って発せられています。観客に受けるため、そして、拍手と劇場窓口の利益のために多くが行われているのです！バケツを逆さまに置いておいたら、せっかく大雨が降っても何が得られますか？ 水を集めることができますか？ 宗教に関する話を聞いても、あなたの心(マインド)がそれを受け入れないなら、あなたは何の利益も得られないではありませんか？

ミストリー博士は、ボンベイ〔ムンバイ〕でのセヴァダル〔無私の奉仕を行うボランティア〕の活動である献血、病院の病室訪問、貧しい入院患者への奉仕のことを話してくれました。実に、奉仕はエゴを消し去って人に本当のアーナンダ〔至福〕を与えてくれる行いです。ミストリー博士はパールシー〔インドに住むゾロアスター教徒〕ですが、博士がいかにかヒンドゥー教の聖典も熟知しているかに注目しなさい。そのおかげで、博士は今、皆さんに、シヴァ神、パールヴァティー神、ガナパティ神〔ガネーシャ神〕はゴールへと向かうカルマ、バクティ、グニャーナのマルガ〔道〕の象徴として解釈され得るということを説明することができたのです。

すべては一なる神の姿であるという信念を持って行われるセヴァ〔無私の奉仕〕は、最高のカルマ〔行為〕です。セヴァのインスピレーションは、頭ではなくハートから生まれることに着眼して見てみなさい。以前、ホワイトフィールドにある人文科学の大学の講師と学生たちに話をした時、私は年長者を敬う必要について語りました。今、学生は教師に対してうなずいたり頭を動かしたりする挨拶をしています、ただそれだけです。私は学生に、「うなずくこと」は距離、敵意、不和を意味すると伝えました。それは、学生と教師が対峙（たいじ）していることを明らかにし、互いに他人であることを示しています。私は学生たちに、そのような考えは捨て、

先生を友人として、そして、セヴァに従事する導き手であると同時に学び手でもある者として受け入れるようにと望みました。私は両者の間に愛と尊敬の念が行き交うことを望みました。

クリシュナとバララーマの英雄的活躍

今、私は〔この講話を〕終わりにして、楽屋にいるヴェーダパータシャーラ（ヴェーダを勉強する学校）の子供たちのもとに行かなければなりません。彼らは霊的な甘露でいっぱい劇を演じることでしょう。というのも、神を味わったことのある人たちは、神は「ラソー ヴァイ サハ」（神は甘露そのもの）であると表現しているからです。神の物語は言葉にならないほど甘いのです。全世界は神のおかげで甘美であり、全世界は神であるがゆえに喜びを与えます。あなた方はその喜びをどうやってつかんで保っていいかを知らず、そのせいで喜びと悲しみの間を行ったり来たりしています。喜びを完全に、常に得ていなさい。そうすれば、生まれることも、死ぬこともなくなります。あなたは不滅です。あなたは至福であり、力であり、英知なのです。

少年たちが演じようとしている劇の中で、私はカムサ、ゴーピー、アクルーラ、デーヴァキー、ヴァスデーヴァ、ナンダといった、私の昔のバクタ〔バクティを有する者〕たちの生涯における出来事を描

いています。少年たちにとって幸運だったのは、私が何日も夕方に彼らと一緒にいて、歌い、セリフを繰り返したことです。

そのおかげで、少年たちはそれらの偉大な真理を学び、皆さんの前で感動的な出来事を演じ、演者も観客も喜びを得て、分け合うことができるのです。少年たちは役を完全に表現することはできないかもしれませんが、皆さんはその感動と、それが伝えようとしている霊的な教訓を吸収することができるでしょう。

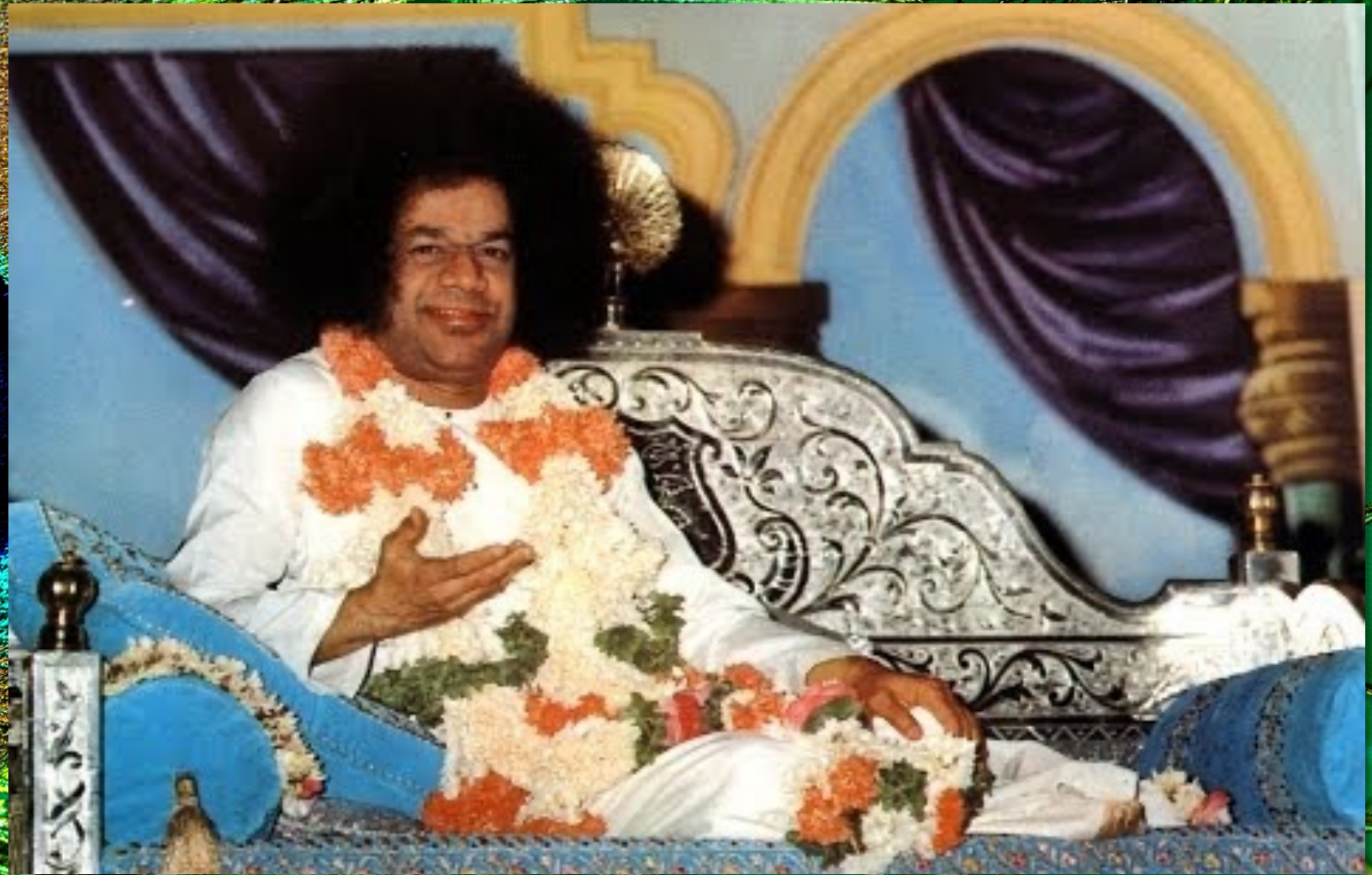
物語は、カムサが宿敵である7歳の牛飼いの少年クリシュナとその兄バララーマを自分の都や宮殿に連れてきて、王家の象や闘士の力を借りてクリシュナを殺そうとたくらむところから始まります。その後の場面では、神童と離れ離れになってしまったゴークラ村の牧女たちの苦悩、里親を悩ませるジレンマ、そして、クリシュナ兄弟がカムサの待つマトゥラーの都へと旅立つ様子が描かれています。クリシュナは自分を招待した君主のもてなしではなく、貧しい信者のもてなしを受け入れ、クリシュナの来訪は民衆に大きな喜びを与えます。一方、牢獄（ろうごく）にいた両親は、長年離れ離れになっていたクリシュナとの再会を喜びます。看守たちは、象と闘士を亡きものとし、最終的に王であるカムサ本人に屈辱と崩壊をもたらしたクリシュナとその兄の英

雄的な活躍、都に響きわたったその一連の勝利を、その都度、両親に伝えます！ クリシュナとバララマは牢獄に侵入して両親を解放し、そこで劇は終わります。

演者たちの若い年齢にとらわれてはいけません。彼らから発せられる言葉は賢明で、治癒力があります。それらはヴェーダやシャーストラの教えです。あなた方のハートの中にそれらを大切に収めて、少なくともそのうちのいくつかを日々実践することを決意して、それぞれの地元へと発ちなさい。



サティヤサイ ババ述
ダシャラー祭 (ナヴァラートリ祭)
プラシャーんティ ニラヤムにて
1969年10月17日
Sathya Sai Speaks Vol.9 C25



シュリ サティヤ サイ ババ様 御生誕100周年記念ヴィジョン



ハートの中におられる神様を絶え間なく憶念し
人類同胞愛という一体性の花を捧げます



人生の旅の荷物

SSSIOJ会長 住友正幹

ある男が死にました。気がつくと、神様がスーツケースを手近づいて来るのを見えました。

神様と死んだ男の会話。

神様：息子よ、もう行く時間です。

男：こんなに早く？いろいろと予定があったのに。

神様：残念だが、もう行く時間です。

男：そのスーツケースの中には何が入っているのですか？

神様：あなたの荷物です。

男：僕のもの？僕のものって、服とかお金とか？

神様：それはあなたのものではありません、地球のものでした。

男：それは僕の思い出？

神様：いいえ。それは時のものです。

男：それは僕の才能ですか？

神様：いいえ、それは「状況」に属しています。

男：私の友人や家族でしょうか？

神様：いいえ、彼らはあなたが旅した道に属しています。

男：それは私の妻と子供たちですか？

神様：いいえ、それはあなたの心のものです。

男：ならば、それは私の体に違いない。

神様：いやいや、それは埃から造られたものです。

男：じゃあ、それはきっと私の魂に違いない！

神様：残念なことに、君は勘違いをしている。あなたの魂は私のものでした。

男は目に涙を浮かべ、恐怖でいっぱいになりながら、神の手からスーツケースを受け取り、それを開けた...

空っぽだった...

涙で頬を濡らしながら、彼は神に問いかけた。

男：僕は何も持っていなかったのか？

神様：そうです。あなたは何も所有したことがあり

ません。

男：では、何？私のものは何だったのですか？

神様：あなたのMOMENTSです。あなたが生きたすべての瞬間があなたのものでした。

すべての瞬間に善を行いなさい。

すべての瞬間に良いことを考えなさい。

すべての瞬間に神に感謝しなさい。

人生はこの瞬間だけです。

それを生き、愛して、楽しみなさい。

この小話は、私のものは何もないという真実を伝えてくれています。そして今という瞬間を生きることが大切であると...

実際、私たちが所有するものは何もありません。土地や建物も、お金や宝石も、家族や親類も、冷静に考えれば自分のものとはいえません。土地や建物は自然のものであり、お金や所有権は人間が考えた約束にすぎません。家族は旅の同行人に過ぎず、人生という旅が終われば終わるものでしょう。自分の体もまた、道具であり自分自身ではありません。すべては束の間のものでした。

しかし、我々は自分のものに大いに執着しており、その執着が苦しみを作り出しています。



スワミはその可笑しさをいろいろと説明してくださっています。

ここに自分のベントがあるとして、所有者は、それを誇りに感じたり大切に思ったりするでしょう。でも、もしそれが隣のガレージにあるベントだとしたらどう思うのでしょうか？というものです。自分のベントだと思えばボディに少しでも傷つけば大変なショックを受けるでしょう。しかし、隣のベントだと傷ついてもなんとも感じないのです。その差は自分のものという意識があるかどうかです。

家族が病気になれば、心配して祈ります。「神様、どうか家族を助けてください」でも、新聞に誰かが交通事故にあって亡くなったという記事を見ても、動揺することはありません。その理由もまた、自分のものという意識があるかどうかでしょう。

そのような自分のものという幻想を克服するために、スワミは面白いたとえ話をしてくださいます。

「もし、学校の校長先生が、転任することになって、その学校にあった音楽室の楽器や図書館の本を持って行けないからといって、嘆くことはありません。それはそれらのものが、自分のものではなく、預かりものだ知っているからです。同様に、私たちが自分のものだと思っている財産などすべてのもの

のも預かっているだけであり、返す時がきても嘆くことはありません」

そして家族への執着に関しては、次の御言葉が参考になります。

スワミの御言葉

「主は決してあなたを見捨てません。あなたが経てきた過去世の数を考えてみれば、あなたには数えきれないほどの母親、父親、妻、夫、息子、娘、友人、敵がいました。その人たちは今、生存していますか？ その人たちは、あなたとの関係を覚えていますか？ もはや、あなたはその人たちにとって何者でもなく、あなたにとってその人たちは何者でもありません。しかし、あなたにも、その人たちにも、変わる事のない身内である共通の主がいます。主はすべての生を通じて存在しています。主は永遠です。主は、生から生へとずっとあなたを見守っています。そのような主を忘れることより大きな悲劇があるのでしょうか？」

サティヤサイ出版協会『坐禅の源流』
第八章より

自分のものや自分に関係するものなど何もありませんが、仮に自分のものがある、自分に関係するものがあると限定すれば、それ以外のものは自分のものではないと宣言することになります。反対に自分

のものは何もないと限定しなければ、すべては自分のために用意された神様からの恵みであることに気づきます。

さらに、人生のもう一つの重い荷物を減らす必要があります。それは欲望という荷物です。

欲望がなぜお荷物なのか？ それは、スワミのご説明では、「欲望とは、より多くの燃料を求めて、より激しく燃え盛る焚火であり、一つの欲望が十の欲望へと導き、人は欲望の要求を満たそうとする中で自らを疲弊させてしまう」からでしょう。

スワミの御言葉

「人生は長い旅であり、皆さんの欲望は荷物です。『荷物を少なくして快適さが増すと、旅は楽しくなる』と言われています。人生という旅は、皆さんが欲望という荷物を減らした時に、初めて楽しいものとなるのです。欲望が少なれば少ないほど、あなたは幸福になります。『バガヴァッドギーター』はすべてを神に捧げるべきだと説いています」

1963年2月6日 ウパナヤナ連続講話より

サッティヤム シヴァム スンダラム 5

第43回

ナローッタム・メングラ・アルレージャ医師は、1975年にババの病院の院長になり、さまざまな才能をもとに、完全なる献身をもって30年にわたり病院に奉仕してきました。アルレージャは、ボンベイ〔現ムンバイ〕出身の真面目で誠実な霊性の求道者でした。彼は、140歳という高齢で肉体を去った、あるスィダ・プルシャ〔覚者〕によって示された自分のグルを捜し求めていました。アルレージャがその聖者にマントラを授けてくださいと懇願した時、その聖者は、自分はまもなくこの世を去るのでお前のグルになることはできないと答えました。しかし、その聖者はアルレージャに、いずれお前はマハー・グル〔大師〕に出会うだろうと断言しました。

アルレージャはグルを探し求めて1965年にブリンダーヴァンへやって来ました。ババがアルレージャにお掛けになった最初の言葉はこうでした。

「ドクター、あなたはいつボンベイから来ましたか？」

アルレージャは、どうしてババが自分の職業や、どこから来たのかご存知なのかと不思議に思っていたその時、バガヴァンは彼をインタビューに呼びました。ババはお尋ねになりました。

「あなたは何が欲しいですか？」

「神の恩寵により、私は、自分が欲しいと思っていたものはすべて手に入れました。私にはこれ以上望むものは何もありません」と、アルレージャは答えました。

「ですが、あなたにはまだ欲しいと思っているものがあるはずです。私はあなたが望むものは何でもあげましょう」

「ババ、私のブッディ〔知性〕が、私に物質的なものは何も求めないようにと促しているのです」

「そうです、分かっています。あなたはパリパヴカ・ブッディ〔成熟した知性〕を持っています。大変よろしい。あなたは何が欲しいですか？」

「私にバクティ〔神への愛／信愛〕とシュラッター〔固い信心〕をお与えください」

バガヴァンは彼の頭に触れて祝福を与えるような仕草をなさり、アルレージャはバガヴァンの御足に触れようとひざまずきました。彼はババの小さな輝く御足が大きな御足へと変わっていくのを見て、大変驚き、大いに喜びました。その大きな御足は、彼にマントラを授けることを拒んだスィダ・プル

シャの御足でした。マハー・グルを探し求める彼の探求は、この日、ブリンダーヴァンで終わりを告げたのでした。

それから10年にわたって引き続き起こったたくさんの不可思議な体験によって、とうとうアルレージャ医師は、ボンベイからプラシャーンティ・ニラヤムへと引き寄せられました。それらの中でも最も驚いたのが次の体験でした。

アルレージャがボンベイで認定医として働いていた時のことです。ジョセフという名の男が溺れ死に、その遺体が彼の所に解剖のために運ばれてきました。アルレージャは遺体を調べ、死因は溺死であるという証明書を発行しました。いつもの習慣に従って、警察にもその書類の写しを送りました。数日後、ジョセフの親戚たちの心に、あれは溺死ではなく殺人事件ではないかという疑念が湧き上がりました。その時初めて、職務に対するアルレージャの誠実に疑いがかかりました。彼は助けを求めてババに祈りました。

裁判所の命令により、遺体を掘り起こして調べ直すことになりました。死体解剖から33日後のことでした！警察本部長のジョン・クロフトがアルレージャ医師を墓地に連れていきました。棺の蓋が開けられた時、遺体はまるでたった今埋められたかのよ

うな生々しい状態でした。本部長は遺体の手足を持ち上げて調べ、遺体には何の損傷も骨折もないと納得しました。

警官たちがその場所を去った後、アルレージャが自分の車に向かって歩いていた時、ふと、「どうして一ヶ月も経った遺体があればほど新鮮なままなのだろうか？」という思いが浮かびました。戻って棺の蓋をもう一度開けてみると、遺体はすっかり壊変していました。アルレージャは大変驚きました。そこにあったのは朽ちかけた肉の塊でした！

驚きで呆然としたまま家に帰ると、彼は妻からぞくぞくとするような話を聞かされました。家の敷地の中で、バガヴァンが一匹の大きな魚を手を持って、ぶらぶら揺らしているのを見たというのです！ その光景は妻の心配を完全に払拭してくれていました。

夫妻は急いでプラシャーンティ・ニラヤムへ行き、自分たちの救世主に感謝しました。ババは我を忘れて喜んでいる夫婦にこうおっしゃいました。

「そうです、私がああ遺体をそっくりそのまま、新鮮な状態にしておきました。そうしなければ、あなた方は困ったことになっていたでしょう！」

夫妻は感謝に満ちてババの御足にひれ伏しました。

バガヴァンのすぐそばで長年仕えていた間、アルレージャ医師には驚くべき神の力と英知を体験する機会が数多く与えられました。そのうちのいくつかがここに記されています。

バガヴァンのダルシャンを求めてプラシャーンティ・ニラヤムへ来ていたカルカッタ〔現コルカタ〕出身の教授、ゴーシュ博士が、心臓発作に見舞われたことがありました。博士はアシュラム内のイースト・プラシャーンティ・ブロックのアパートの一部屋に滞在していました。バガヴァンはゴーシュ博士の治療をさせるためにアルレージャをその部屋に送られました。癌や心臓病といった重篤な疾患を患っている患者の場合、ババの通常のアドバイスはこうです。

「痛みや不快感の原因を告げるのを急いではなりません。なぜなら、それは患者にさらにショックを与えることになり、患者を半分死んだも同然にしてしまうからです。可能な限り、精一杯治療をして、それから徐々に、段階的に真実を明らかにしていくようにしなさい。心臓発作の場合、呼吸不全という問題がないかぎり、患者をすぐに病院へ搬送してはいけません。まず、家で治療して、それから病院へ移したほうがよいでしょう」

アルレージャはゴーシュ博士の部屋へ行き、診察をしました。明らかに心臓発作の徴候がいくつかありました。患者もそれを疑っていました。しかし、アルレージャは不安を抑えて、いくつかの基本的な処置を施し、さらに、ババから送られたヴィブーティも与えました。バガヴァンの指示どおり、患者

は翌朝、病院へ搬送されました。一日が過ぎましたが、状態にあまり改善は見られませんでした。三日目に、アルレージャが病院へ行くと、ゴーシュ博士は喜びに顔を輝かせていました。完全に健康な様子でした。アルレージャは神が介入されたという確信を持ちました。そうでなければ、このようなことはあり得なかったからです。アルレージャが病室のババの写真に目をやると、ゴーシュ博士が言いました。

「先生、私は昨夜、不安で眠れませんでした。それで、スワミの写真を見ていたら、スワミが写真から出てこられ、私をヴィブーティで祝福してくださいました。それから、私の肩を叩いて〔写真の中に〕戻っていかれました！」

それから数日後、ゴーシュ博士はあふれんばかりの健康と幸福に満たされて、カルカッタへ帰ってこきました。

あるとき、アルレージャ医師は掘削用具で井戸を掘っている夢を見ました。脇にはババが立っておられました。アルレージャが三度虚しい試みをし、四度目を行おうとした時、バガヴァンがお尋ねになりました。

「あなたは何をしているのですか？」

「水を探しているのです」と、アルレージャが答えました。

「あなたは時間と労力を無駄にしています。あなたは三度失敗し、またそれをやろうとしています」

「バガヴァン、お願いです、どうか私がなぜ失敗したのか教えてください。私には何が欠けているのですか？」

「あなたにはタットパラタが欠けているのです」と、ババは言い、消えてしまいました。夢はそこで終わりました。

翌朝、アルレージャはいつものように病院へ行きました。午後一時半にババに自室へ呼ばれるまで、夢のことはすっかり忘れていました。バガヴァンは会話を始めました。

「あなたは昨日、夢で何を見ましたか？」

アルレージャが夢の内容を話すと、ババはおっしゃいました。

「そうです、あなたにはタットパラタ (tatparata) が欠けているのです」

「スワミ。タットパラタとはどういう意味ですか？」

「自分で考えて、私に言ってごらんなさい」

アルレージャは、バガヴァド・ギーターの中から「タットパラハ」 (tatparah) という言葉が出てくる節を唱えました。それは第4章の39節でした。ババはお尋ねになりました。

「その節の意味は？」

「信仰心があり、決意を持ち、感官を制御する者は、英知を得る。その英知はその者に至高の平安を与える、という意味です」

「では、タットパラタは何を意味していますか？」

「決意、注意力、正しいことをすみやかに行う姿勢です」

「そのシュローカ〔詩節〕の文脈では、それは正しい。あなたは何か他の意味を思いつきませんか？」と、ババは探りを入れられました。

「ババ、私には分かりません。私に教え諭してください」

バガヴァンは説明なさいました。

「タットはブラフマン、パラタは立脚しているという意味です。ですから、タットパラタとは、ブラフマンに立脚している、ということです。さあ、理解しましたか？」

「理解しました。ですが、私にはブラフマンの体験などないのに、それを理解して何になるのですか？」

「それはそんなに簡単なことでしょうか？」

「スワミ、それは分かっています。人間には至高の体験など得られるものではありません。たとえどんなに頑張っても——。ダイヴァクリパー〔神の慈悲〕やグルクリパー〔グルの慈悲〕を享受しないかぎり、無理です！」

「すべてはふさわしい時に起こります。人は信仰心と忍耐を培わねばなりません。しかし今、もしあなたが望むなら、私にいくつか質問してもかまいません」

「ババ、あなたは以前おっしゃいました。聖者アシュターヴァクラは、ジャナカ王の耳元でマントラをささやくことによって、王に至高の体験を与えたと。そのマントラは何ですか？ 私の知るかぎり、それはどんな本にも載っていません」

「そのマントラを知りたいのですか？」

「はい、スワミ」と、アルレージャは熱意を込めて言いました。

ババは椅子から立ち上がり、アルレージャの耳元まで身を屈め、おっしゃいました。

「タット トワム アスイ！」〔タットワマスイ／汝はそれなり〕

たちまち、アルレージャは一切の分離感を失いました。そこにはババが、ババのみが存在していました。

ババが「さあ、もう理解しましたか？」とアルレージャにお尋ねになると、アルレージャはやっと我に返りました。

アルレージャは答えました。

「はい、スワミ。すべてはブラフマンです！」

そして、彼はスワミの御足にひれ伏しました。

ボンベイにいるアルレージャ医師の姉は、乳がんと診断されていました。彼女の夫はタタ基礎研究所の核科学者で、ババを信じていませんでした。さらに言えば、どんな聖者もサードゥ〔出家行者〕も信じていませんでした。彼女は神を信じていましたが、

ババに対してはどんな感情も持ったことはありませんでした。姉は癌であると診断したアレルギーの弟は、アレルギーに、姉の手術のことでタタ記念病院の外科部長であるラームダース医師に話をしてほしいと頼みました。アレルギーはボンベイへ行き、ラームダース医師と話をし、手術の日取りを決めました。

その時、ババはボンベイにいたので、アレルギーは姉のためにババの祝福を得ようと、ダルマクシェートラ〔ボンベイにあるババのアシュラム〕に行きました。アレルギーがババにプラサード〔神から流れ出る恩寵としての食べ物や薬〕を懇願すると、ババはアレルギーにお尋ねになりました。

「彼女は私を信じていますか？」

アレルギーはババに言いました。

「スワミ、分かりません。あなただけがご存知です。それに、たとえもし彼女があなたを信じていないとしても、あなたは彼女に信仰心を与えることも、彼女を治すこともおできになります！」

ババはヴィブーティを物質化してアレルギーに与え、これを7日間彼女の左胸に塗るようにと指示なさいました。アレルギーは、手術は2日後に行われるのに、どうしてそのプラサードを7日間塗ることができるのかと、不思議に思いました。けれど、すぐに彼はその手術が一週間延期になったことを知らされました。ラームダース医師は緊急手術のため

にマドラスへ出向かなければならなくなったのです。

アレルギーは、ババのプラサードが「癌を消滅させてくれる」と信じていました。アレルギーがそう信じていることを義理の兄に打ち明けると、彼はこう言われました。

「君は愚かだ。どうやってヴィブーティで癌を治すことなどできるのだ？」

そして、義理の兄は手術がスケジュールどおり行われることを望みました。アレルギーの姉は、心がぐらついて迷っていましたが、夫に説得されて手術を受けることにしました。ラームダース医師が手術をするのを、アレルギー医師は立って見ていました。

取り除かれた腫瘍の3つの組織が再度、生体検査に送られました。そのどれもが癌ではありませんでした！二人は当惑しました。義理の兄は、確認のために4枚のスライド全部を著名な癌専門医であるプランダレ医師に送ることを提案しました。1枚目のスライドは手術前の状態、後の3枚は手術後の状態が映っていました。スライドを見ると、プランダレ医師は、最初のスライドは極めて重い悪性腫瘍の相を呈しているが、他の3枚には癌の様相が何も見られないという見解を述べました！この出来事は、アレルギー医師の家族に計り知れない衝撃を与えました。ババは、「癌の消滅」という喜びとは別に、信仰心という最も貴重な贈り物を彼らに与えてくだ

さったのです。一方、アレルギーの姉は、手術をする前に弟の言葉を完全には信じていなかったことを後悔しました。彼女は、せめて手術の前に腫瘍の再検査を主張すべきだったと思いました。



帰依者インタビュー - 私の旅 - 第7回

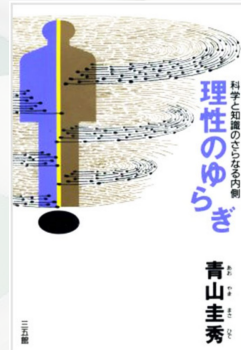
サティヤ サイ 出版協会 代表理事
比良 竜虎

日本でのひろがり

前回は、日本でサティヤサイオーガニゼーションが誕生した頃の話と、津山先生とのお縁で始まった奉仕活動や、Sis.津山の翻訳などのおかげで、サイの活動が徐々に広がっていったこととお話しました。

もう一つ、サイ ババ様の御名が日本中に広がるきっかけとなった出来事がありました。青山圭秀さんがババ様に会いに行ったときの体験談を記した著

書『理性のゆらぎ』が、1993年にベストセラーになったのです。その本を読んだ多くの日本人が、インド人が中心となって立ち上げた東京、神戸、横浜、沖縄のサイセンターに足を運び、バジャン会や奉仕活動に参加するようになりました。そして、日本人が世話人を務める新しいサイセンターやサイグループが次々と誕生しました。しばらくするとその現象は落ち着きましたが、サイ ババ様のことを敬い、信じ、慕い、愛している方は、今も日本国内にたくさんいます。



日本でのサイの活動は、1975年に神戸でバジャン会が始まってから、まだ47年しか経っていません。神という概念は何千年、何万年も続くものですから、サティヤ サイの御教えが日本中そして世界中の人々の中に深く浸透していく歩みは、まだ第一歩を踏み出したとも言えない状況だと思っています。日本に限らず、サイ ババ様の助けが必要な人々にサイの御教えが届くには、まだまだ長い年月がかかることでしょう。

これからの道のり

なぜそのように思うかという、ババ様がどれほどの存在なのか、どれだけ自分を助けてくださる存在なのかを、ほとんどの人は未だに知らないからです。神は人々が求めるものであって、こちらから広めるものではないというババ様の御教えもあり、これまで私たちはババ様のことを宣伝してきませんでした。しかしこれからは、人々が自ら神を求める時代がやってくると思います。

イエス・キリスト様が肉体を離れられたのは紀元後33年頃と考えられていますが、今のような形で新約聖書が編纂され、バチカンの地に最初の教会堂が建てられたのは、紀元後4世紀のことで、約400年かかっています。紀元前5～7世紀のいずれかに肉体を離れられたと考えられているお釈迦様の教えが体系化されて、仏教として日本に伝わったのは、紀元後6世紀に入ってからで、およそ千年かかったこととなります。

現在、プッタパルティではセントラル トラストが新しい役割を担うこととなり、グローバル カウンシルが作られました。キリスト教においてバチカンが担った役割と同じように、これからはグローバル カウンシルが、グローバルな役割を担っていくことでしょう。これにはさまざまな議論がありますが、向こう100年、300年、500年という単位で

ものごとを見ていく必要があると思います。

別の例を挙げましょう。シルディ サイ ババ様のサマーディ マンディール（霊廟）に、毎年数億人という人々がお参りに行っています。それだけの人が参拝するのは、その方々の願いがかなえられているからです。



シルディ サイ ババ像
(サマーディ マンディール寺院)

このように多くの方がお参りするようになったのは、有名俳優が出演したシルディ サイ ババ様の映画「Shirdi Ke Sai Baba」が1977年に公開され、一般の方々に広く知られるようになったことがきっかけでした。シルディ サイ ババ様が肉体を離れら

れたのは1918年のことでしたから、およそ60年後ということになります。それから40年ほど経ち、没後100年が経過した現在では、年に数億人という人々がサマーディ マンディールを訪れているのです。



サティヤ サイ ババ様のマハーサマディ
(プッタパルティ)

同じように、プッタパルティのサティヤ サイ ババ様のマハーサマディ（霊廟）も、聖地となっています。これからますます、自ら神を求める世界中の人々の間にサイ ババ様の御名と御教えが必要となり、サイ ババ様のマハーサマディを訪ねる人、御教えを学ぶ人が増えていくことでしょう。

神様の役割

インド、日本、アメリカなど、それぞれの国によって、そして時代によって、神様の役割は変わっていくのだと思います。「魂の向上」という一つの大きな役割のために神様は存在なさっているわけですが、細かく見ていくと、それぞれの国や時代ごとに少しずつ異なるアプローチをなさっていることに気づくでしょう。

最近、私が聞いた話をご紹介します。アメリカにおける社会問題の一つに人種問題があります。2022年の春、アメリカで初めて完全無料のコミュニティクリニックが始まりました。ここでは、シカゴ在住のインド人医師たちが中心となって、ボランティアで診療を行っています。アメリカの医療費が世界一高いことはよく知られていますが、国民皆保険の制度がないため、高額な医療保険に入ることができず、十分な医療を受けられない人々がいます。その中でも特に多いのが、アフリカ系アメリカ人のケースです。このコミュニティクリニックは、そのような人々のために、無償で医療を提供しています。彼らにインスピレーションと導きを与えたのは、ババ様の御教えです。

私たちはまだ基礎作りの段階にいます。

(つづく)

サイと共に

1998年7月17日の会話



スワミ：（ある学生に向かって）
大学はどうですか？

学生： 良いです、スワミ。

スワミ： 大学がですか、それとも建物がですか？ 大学とは何ですか？ 建物ですか、それとも学生ですか？ 学生がいなければ、大学はありません。

学生たちは、スワミに大学に来てくださいと頼んだ。スワミは返事をなさらなかった。スワミは副学長を呼び、あるVIPの到着についてお尋ねになった。

スワミ：（そのVIPについて副学長に）
とても立派な人物です。彼はいつ来るのですか？

副学長： 明日の夜です。

スワミ： 彼はとても善い人です。彼はベジタリアンです。独身でもあります。今、彼はスワミのところに来たいと思っています。彼は以前ここに来たことがあります。あれは3年前でしたか？

副学長： そうです、スワミ。

スワミ： ええ、私は知っています。彼は政府の科学顧問でした。彼の名前は？

副学長： アブドゥル・カラームです。

〔インドの人工衛星やミサイル開発に貢献する科学者であり技術者。この対話後の2002年に第11代インド大統領となった。〕

スワミ： 日曜日の朝、彼は大学を見にきます。

副学長： スワミ、あなたも研究所にいらっしゃるべきです。

スワミ： 時間がありません。男子学生たちがここに来ます。彼はコンピューターを学んでいる男子学生や、レーザーを学んでいる男子学生たちと話すことができます。レーザー（laser）とは何ですか？ レーザー（razor）〔かみそり〕ではありませんよ！

副学長： スワミ、どうか大学にいらしてください。

スワミ： だめです。彼が来るのは明日の夜です。

Students With Sai: Conversations 1991 to 2000 p.227-228より



帰依者体験談

タイサイスクール教師
鶴田 雅子

インドにおられる神の化身 “サティヤサイババ様”との出会い

オームサイラム、ババ様の蓮花の御足に祈りを捧げます。

私は、小学生の頃から動物性アレルギーに悩まされてきました。主治医からは、お肉はなるべく食べないようにと言われていましたが、当時の公立小中学校の給食は殆どが肉食で、「食事のアレルギー」という言葉は通用しませんでした。その後、イギリスのボーンマス高校に入学した私は、友人から菜食を勧められベジタリアンになってからというもの、

アレルギーに悩むことは非常に少なくなり、以前より健康になりました。

イギリスには7年間滞在し、アングロコンチネンタル英語学校に1年間、ボーンマス高校に3年間、レーボンス大学に3年間在学しました。大学卒業後は日本に帰国して英会話学校で教師をしながら、東京サイセンターでいろいろな活動に参加しました。その後はフランスに渡り、パリに古くからあるフランス語学校“アテネフランセ本校”に通いながら、パリのサイセンターで奉仕活動を続けました。当時のパリには、確か6箇所のサイセンターがあったと記憶しています。

阪神淡路大震災（1995年1月17日）のニュースを新聞で読んだのも、パリのオペラ座行きのバスの中でした。

2ヶ月後の3月27日明け方、日本にいる妹から、父が急死したという悲しい知らせの電話を受けました。その数時間後にはパリのオペラ座にあった日本航空のオフィスで翌日の飛行機の切符を購入して、帰国の途につきました。

実家がある当時の茨城県では、自宅で葬儀を行うのが慣例でした。家族でご近所の方々や親戚一同、友人一同、お悔みに来てくださった方々を手厚くおもてなししなければなりません。悲しむ間もなく、私は台所と応接間、仏間やリビングを往復しながら

お客様の接待に追われました。無事に父の葬儀を済ませ、残して来た荷物を取りに1ヶ月後の4月下旬、パリに戻りました。

私がスワミのことを知ったのは、イギリス留学中のことです。「ぜひ、インドにあるスワミのアシュラムを訪問したい」と思いながらも、長い年月が経っていました。

母に、「一家の大黒柱だった父親が亡くなり、今後の生活について計画するためにも、スワミにお会いしたいのです。神の祝福をいただいてから日本に戻らせてください」と電話で許可をもらい、5月末日、フランスのシャルル・ド・ゴール空港からインドのバンガロール空港に飛び立ちました。

バンガロール空港に到着して一番驚いたのは、建物の外で大勢の人々が喚き合っていることでした。パリの自宅からはベントウのタクシーにりましたが、バンガロールで乗ったタクシーは、相当古い中古車でした。車内に砂埃が充満するので不思議に思っていると、ギアの下に大きな穴が空いていたのです。当時のインドは、殆どの道路がコンクリート舗装されていませんでした。空港からアシュラムへの道路も、土の道だったのです。口を布で覆い、オームサイラムと唱え、スワミに祈りながら、やっとの思いでホワイトフィールドにあるアシュラムに夕方遅く到着しました。昔も今も夕方の決まった時間になると、アシュラム内のアコモデーションは閉鎖されま

す。仕方なく、私は近くにあるアパートの一室を借りました。

翌朝、今生での最初のダルシャンに行きました。引いたクジの番号は、12番でした。その後、再度アコモデーションに行きましたが、サマーコースの真最中なので、外国人帰依者用の部屋は用意できないと断られました。

翌々日、サティヤサイ大学ブリンダーヴァンキャンパスの講堂で、スワミが講話をされていました。講堂の中には入れませんでした。講堂の外で外壁に寄りかかりながら、立ったままスワミの御言葉を聞いて、非常に感動し、涙が出て止まりませんでした。今まで抱いていたスピリチュアルな疑問のすべてが、その講話で解明されました。その瞬間、「自分は今生、この方に逢うために生まれて来た」と、実感しました。

当時のダルシャンでスワミは、帰依者が両手で持っているキャンディーを右手で掴み、周りにいる帰依者たちに配っておられました。ある日、その祝福されたキャンディーが私のいる場所に降って来ました。それを日本にいる母に、アシュラムの外にある郵便局から郵送しました。郵便局はアシュラムの裏にあるのですが、あまりにも道路状況が混沌としているので歩いては行かず、乗り物に乗って行ったと記憶しています。当時は、牛車、オート力車、バイク、野良犬、牛、人間の数の方が、車より多く道

路を行き交っていました。

スワミが祝福してくださったキャンディーには、人一倍の想いがあります。フランスにいたときにフランス人の帰依者から、スワミが祝福してくださったキャンディーをいただきました。大事に包装して、パリから日本の父に郵送しました。数週間後、父と電話で話した際に、「インドの飴より、日本の飴の方が美味しい」と父は言いました。その時は、まさかそれが父との最後の会話になるとは思いもしませんでした。

父が亡くなり、その葬式の準備に追われ、疲労と悲しみでぐったりとしていた時、スワミが夢に出て来てくださいました。真っ白なローブを召されて、「宇宙へ一緒に旅立とう」と誘ってくださったのです。あまりにも衝撃的だったので、驚いてその誘いを断ってしまいました。今思うと、本当に残念な話です。

スワミは、私がホワイトフィールドのアシュラム（ブリンダーヴァン）に到着してから間もなく、プッタパルティのアシュラム（プラシャーンティニラヤム）に移動されました。私も車を手配して、プラシャーンティニラヤムに向かいました。数日後、スワミから初めてインタビューをいただきました。そして、確かその次のインタビューで、「直接、ここを出る許可があるまで滞在するように」とスワミが仰せになり、私のアシュラム生活は始まりました。



スワミに花を捧げるSis.鶴田

そのインタビューから、27ヶ月後のインタビューで、「アシュラムを出て、行ったり来たりするようにした方が良い」と仰いましたので、私は日本に帰国し、長いアシュラム滞在の幕は降りました。

タイに長居することになった状況

以前、ホワイトフィールドのアシュラムのブリンダーヴァンで、ある日本人に、「貴方は、タイ人でしょうか?」と言われました。その時は、はっきり「いいえ、日本人です」と答えましたが、アシュラムで起こることは将来的に起きることですと、人伝てに聞いたことがありました。確かに、長くいるつもりがなかったタイに、24年経った現在も滞在しています。

最初にタイに行くことになったきっかけは、1997

年のババ様の御降誕祭に、プラシャーンティニラヤムで開催されたサティヤサイ教育機関の展示会でセヴァをさせていただき、ババ様が推奨する教育の真髄であるエデュケアに、心を奪われてしまったからです。



第一回エデュケア教師養成セミナー
(プッタパーティ)

私の父方の祖父は、公立中学校の校長を長年務めていました。その血を受け継いだのか、それまで聞いたことのない新しい教育方針に強く共感しました。その当時、日本のサイオーガニゼーション会長を歴任されていた神戸のチャブラニさんが、私がタイのサイスクールでエデュケアを学び、経験を積めるよう、推薦状を書いてくださいました。チャブラニさんはその時すでに、私がタイに長くいることになると見通されていたようです。

タイのドンムアン空港に到着して、迎えに来ていた車に乗り、最初の一泊はバンコクの帰依者の家で過ごしました。翌日、舗装されていない狭い田舎道を北東に約204キロ、自然の風が入ってくる大型バスに揺られ、ロブリー県ラムナライ町にあるサイスクールに向かいました。タイは今でも、首都バンコクと地方との格差が非常にありますが、24年前のタイの田舎では、電気や水道の設備は整っておらず、テレビや冷蔵庫の無い家庭が殆どでした。

サイスクールに到着して一番驚いたことは、大きな穴が空いている靴下にサンダル履きで、元気いっぱい泥の道を駆け回っている子供たちの笑顔、逞しさ、慎ましさ、賢さ、そして可愛らしさです。昔は今と違ってサイスクールの知名度は高くなかったため、家庭に問題のある子供たちのみが、全寮制のサイスクールで学んでいました。そのお陰で、日本では体験することのないような貧困や、楽ではない境遇にあっても、健気に生きようとする逞しい子供たちと出会い、生きようとする思いがどれほど大切であるか、人間の強さ、深さ、命の輝きを実感しました。

そのサイスクールで、昔も今も変わっていない出来事は、スワミが時々、肉体を伴って現れ、学生寮、食堂、教室の内外、校庭を歩かれることです。この現象は多くの学生、父兄、来賓客、職員たちによって、毎年、目撃されています。

また、サイ大学の学生も交えたインタビューをいただいた際、スワミがタイにお越しになると仰せになったので、タイのサイスクールでは、早速、スワミの家を敷地内に建設しました。スワミの寝室では、ヴィブーティが物質化されていたり、スワミの足跡が鮮明に残っていたりする現象を、私は肉眼で幾度となく見てきました。

2005年8月のスワミとのインタビューで、スワミは、「サイスクールの仕事を減らして、オフィスでの仕事をするように」と、私に仰いました。その場にいたジュムサイ博士は、「雅子先生は、学校にとって必要です」と、スワミに言ってくださったのですが、スワミは、「彼女には、新しいオフィスワークがあるから」と穏やかにジュムサイ博士に仰いました。そして私はその4年後、コンサルタント会社をスタートさせ、14年間ほど、サイスクールとオフィスを両立する生活が続き、スワミに言われた通りサイスクールの仕事量を少なくしていきました。(2022年現在、再び教育関係の仕事が増えています)

思い起こせば、私はタイに渡ったものの、一年で日本に帰国するつもりでいました。しかし1996年、マハーシヴァラートリの前々日、スワミが私の夢に出て来られて、「貴方が考えていることは、非常に危険です」と告げ、「どのように危険なのかなあ？」と思うやいなや、ある光景を見せてくださいました。それは、私が断崖絶壁の強風が吹き上げる

岩の上で、吹き飛ばされそうになりながら、凍えて立っている姿でした。

その夢から数日後、当時のタイのサイスクールの校長先生から、正式に教師として採用したいと言われました。勿論、私は即座に承諾しました。



タイのサイファミリー

(右から2人目：ジウムサイ博士、左端：ロレイン先生、真ん中の車椅子のご婦人はSis.鶴田を介してスワミからヴィブーティを頂いた)

あの時、スワミのお導きがなければ、私は日本に帰国していました。そして、サイスクールの教師ではない別の道を歩んでいたはずで、それはきっと私には危険な道だったのだと思います。スワミの愛によって、危険を回避し、タイのサイスクールという神の恩寵に溢れた場所で、尊敬する先生方や沢山の生徒たちと共に、神聖な歳月を過ごすことができました。そして、穢れのない心の子供たちの沢山の笑顔を見られたことは、恩寵の証です。



タイのサイスクールにて
(左端：ジウムサイ博士)

マハーシヴァラートリでの体験

プッタパルティのアシュラムで、1996年～2000年間のことだったと記憶していますが、私はシヴァラートリのバジャンに参加していました。真夜中を過ぎた頃、突然サイクルワントホールに、スワミがゆっくりと歩いてお出ましになりました。それまで眠さと怠さで、ぐったりしていた会場が一気に熱気で盛り上がり、誰もがスワミの近くに行こうと、ダルジャンの最前列を目指しました。スワミは、ある年配の西洋人の女性の前で立ち止まれ、「私は、貴方のハートの中に座っています。そこには、私以外の誰もいません。椅子取りゲームの椅子であっては、いけませんよ」と、そこに居合わせた全員に聞こえるように、大きな声で仰いました。

パリで暮らしていた頃のマハーシヴァラートリでのことですが、バジャンの後、バスに乗って自宅に戻る途中、あるスワミの御言葉が聞こえてきました。『PUT YOUR HEAD IN THE FOREST, PUT YOUR HANDS IN THE SOCIETY (頭は森に、手は社会に)』 その出来事以来、常にその御言葉が私の頭の中にありました。プラシャーンティニラヤムで、最初のインタビューを授かった際、スワミがその同じ御言葉を私に仰いました。その瞬間、あのパリのバスの中にスワミはいらっしゃったと気付きました。全知全能の神の神業です。インタビュールームでのスワミは、まるで自分たちの家の中にいる全知全能の神の如く、まったく違和感がありません。私たちは、普段は興奮しているので、そのことに余り気付かないだけなのかもしれません。

タイのバンコクでは、コロナ前までは毎年、シヴァラートリは、元神戸在住のインド人ご夫妻のご自宅兼バジャンセンターで取り行われていました。祭壇の花がバンジャンの最中に回ったり、花輪が長くなったり、ヴィブーティやクムクムが溢れ出したり、アマリタや聖水が流れ出すことがよくありました。

このご夫妻の御長男は、アメリカの大学を卒業して、ニューヨークにある企業で重役をされていました。しかし、大変不幸なことに、2001年9月11日、アメリカ同時多発テロ事件が発生した際、ニューヨークのワールドトレードセンターで死亡された

被害者2,977人の一人となってしまいました。ご夫妻の嘆きに、私たちは居ても立っても居られない状況に陥りました。それから間もなく、プッタパルティに居られるスワミの元を訪れる機会に恵まれました。インタビューに呼ばれましたが、このご夫妻のことをなかなか伝えることができないでいると、スワミが自ら、そのインタビューの後半に、「バンコクの老夫妻は元気ですか？」とお尋ねになりました。私は、「あの夫妻の長男は、ニューヨークのテロで亡くなりました」と、即答しました。すると、スワミは、「このヴィブーティを夫妻に渡すように」と仰って、私の手のひらにヴィブーティを渡してくださいました。バンコクに戻ると私は真っ先に、ご夫妻の元に届けました。すると、悲しみに沈んでいたご夫婦の顔が一転して笑顔になり、スワミが自分たちのことを気にかけてくださっていることを、とても喜ばれました。

スワミと共に、スワミの御心のままに スワミの道具として

タイの仏教の教えに、『今生の人生は、過去世からのフルーツ（実り）である』という言葉があります。タイ人は、その過去生の悪いカルマを取り除く為に、タンブン（施し、セヴァ、奉仕）をよくします。市場で売られている生き魚を購入して川や海に放流したり、野良犬に餌を与えたり、孤児院や老人ホームを訪問して食事の世話をしたり生活用品の寄付をしたり、神社仏閣で寄付したり、寺院の掃除を

したりします。このような徳を積むことによって、今生での生活が良くなり、更に良い来生が来ると信じているのです。

「私たちは、過去生での良いカルマと悪いカルマの両方の首輪を着けて産まれて来る」というスワミの御言葉があります。アシュラム生活をしていたときに、棘が付いている薔薇の首輪を付けて車を運転している自分の夢を見ました。その夢の最中に、突然スワミが後部座席に現れて、手で合図をされると、首輪が外れました。その時は啞然としていて、意味が分かりませんでした。今思うと、スワミの恩寵で非常に悪いカルマの鎖が、解き放たれたという意味ではないかと思います。確かにあの時期、私は重い病気に数回かかったのですが、なんとか回復し命拾いをしました。

スワミの恩寵は宇宙よりも偉大で、私たちの能力では、計り知ることは不可能です。2011年4月初旬、私はスワミの夢を見ました。スワミは、『宇宙を救う為に、大地の中に間もなく入ります』と仰っている夢でした。驚いて、パルティに住む古い友人に電話をかけると、彼女も同じような夢を見たということです。彼女の夢は、スワミが大地のエネルギーを支えて保護しておられる夢でした。その2週間後に、スワミは肉体から離れられました。

最近、スワミと生活を共にされたインドのサイ大学の元学生と、束の間の時間を過ごす機会を得まし

た。彼と彼のご家族のそばにいと、スワミが彼らのそばにいとことを実感します。スワミが私たちに求めていることは、真に私たちがスワミの帰依者として、スワミと共に、スワミの御心のままにすべてを受け入れて、スワミの道具として、この社会の中で生活をするということではないでしょうか。

みんな幸せになりますように
みんな幸せになりますように
みんな幸せになりますように
シャンティ シャンティ シャンティヒ
サイラム



エデュケア教師セミナー（プッタパルティ）

プロフィール: 日本人として初めてサイスクールの教師となる。タイの国立チュラロンコーン大学教育学部博士課程を修了。1995年7月～1997年10月、プッタパルティのアシュラムに滞在。1998年5月～2016年、タイの全寮制のサイスクールで教鞭を取る。現在もエデュケア（五大価値を引き出すプロセス・真の教育）をタイに広める活動を継続中。

ワカ チンナ カタ

サイ ババ と 男子生徒

かつて、算数がとても苦手な男子生徒がいました。試験の日がめぐって来たとき、生徒はサイ ババの寺院に行って、もし質問が簡単ですべての計算問題に正解することができたなら甘く料理したお米を5キロ捧げます、と誓いました。試験問題はその生徒の実力でも十分に解ける問題でした。生徒は2時間以内にすべての質問の答えを書き終えました。計算問題はすべて正しく解くことができました。その上、まだ1時間も余っていました。

そこで、生徒は2、3枚の紙を取り出し、サイ ババに誓った捧げ物を準備するため、価格の付いた品目リストを作りました。ポケットの中には10ルピー紙幣が1枚入っていました。ところが、お米、砂糖、カシューナッツ、カルダモン、ギー〔バターオイル〕、干しぶどうなどの価格を合計すると、約15ル

ピーも必要であることがわかりました！ 生徒は2、3品目を取り消して、その分の量を減らしてみましたが、合計額はどうしても彼が支払える金額を超えていました。

そこで、生徒は考えました。サイ ババには甘く料理したお米など必要ではなく、果物が2、3個あれば十分満足するはずだ、と。果物もかなり高価であることに気づきましたが、花はさほど高くありませんでした。しかし、生徒はギーターの中で神が、「私を喜ばせるにはパートラム（葉っぱ）、プシバム（花）、パラム（果物）、トーヤム（水）があれば十分である」と述べていたことを思い出しました。そのため、最終的には自宅の井戸から汲み上げたトーヤム（水）が、その日受けた神の恩寵に対する十分なお返しになるだろうと判断しました。生徒はうまい具合に自分が見たかった映画のために10ルピー紙幣を取っておくことができたのです。映画の料金を計算してみると、友達も1人連れていく余裕があることがわかり、嬉しくなりました。彼がこの幸せな結末にたどり着いたちょうどそのとき、試験監督が、試験時間が終わったので解答用紙を提出するように告げました。

私たちの友〔その生徒〕は夢から目覚め、あわててすべての品目の分量と価格を計算した方の紙を提出してしまいました。甘く料理したお米の捧げ物、

果物や花、そして最後に映画の料金が書かれていたあの紙でした。自宅に帰ったとき、少年は自分が持ち帰った紙を見て、それが試験監督に渡すはずだった解答用紙であることに気がつき、頭の中が真っ白になりました！

すべては反応、反響、反射です。あなたが他人にしようと計画したことはあなた自身に跳ね返ってきます。神は、怒ったり復讐（ふくしゅう）したりしません。神は、この人生という演劇の永遠の目撃者です。あなたの邪悪な思いや行いを罰するのはあなた自身であり、あなたの善良な思いや行いに報いるのもあなた自身なのです。それが、偽りのない真理です。

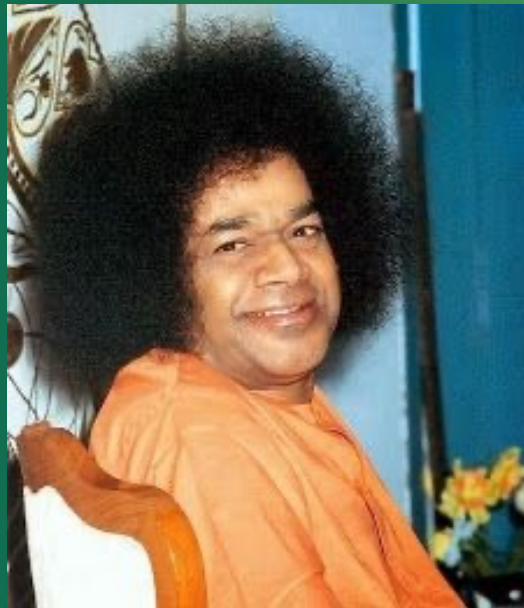


『ワカ チンナ カタ』とは「ある小話」という意味のテルグ語で、ババ様が御講話の中で話された、たとえ話や物語です。



<活動報告 1>

インドフェア神戸



AUM SRI SAI RAM

スワミの蓮華の御足にお祈りいたします。

2022年8月11日～14日の4日間、神戸市ハーバーランドにおきまして『インドフェア神戸』が開催されました。2022年は、日本とインドにとって「日印国交樹立70周年記念」「インド共和国建国75周年記念」の大きな節目の年になります。

日本とインドの霊性文化の交流は、公式記録としては752年（天平勝宝4年）4月9日の東大寺の廬舎那仏（るしゃなぶつ）開眼供養の儀式「開眼供養会（かいげんくようえ）」まで遡ります。その開眼式の導師をつとめられたのは南インド出身の菩提僊那（ぼだいせんな）というバラモン高僧であり、約200mにも及ぶ太い縄紐を筆として、大仏に目が書き加えられたと記載されています。

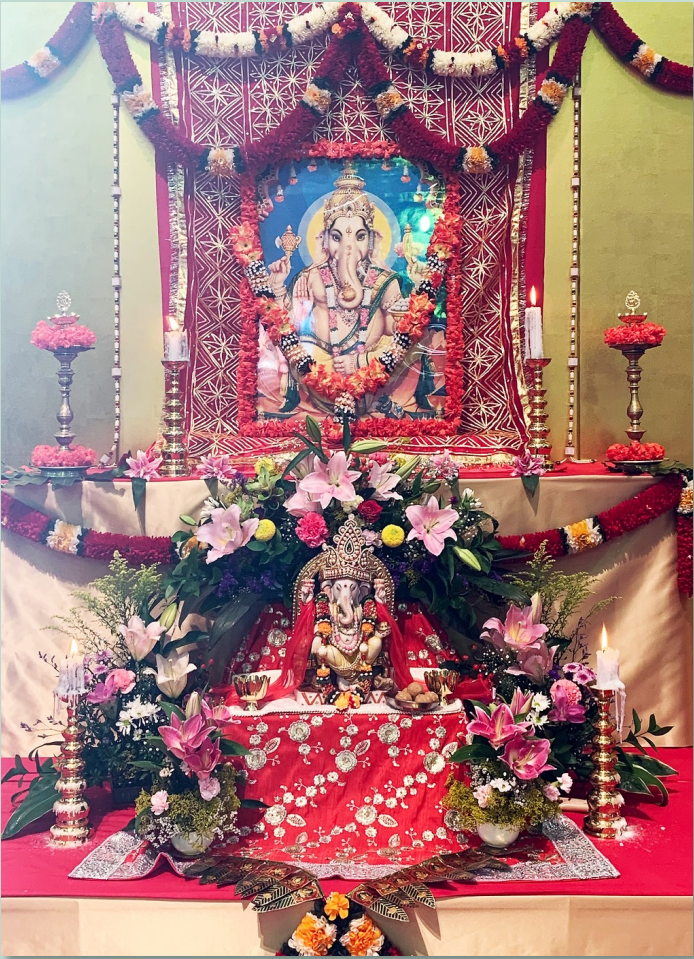
開眼式より遡ること約150年前の西暦604年、日本では聖徳太子によって『十七条憲法』がつくられ、その第一条「以和為貴：和を持って貴しとなす」に続く第二条は、「篤敬三寶：篤く三宝（仏法僧）を敬え」といった仏教的教義が盛り込まれており、霊性を基盤とする重要性が条文冒頭で説かれています。

1979年にサティヤ サイ神戸センターが設立され、翌1980年に東五反田でサティヤ サイ東京センター、続いて1982年にサティヤ サイ横浜センターが発足しました。日本におけるサイ ババ様の御教えの始まりは、地理的には神戸の地であり、そして東京、横浜、全国へと広がっていきました。その始まりの地、神戸の地において、スワミの御教えに触れられる機会、日本とインドの霊的な絆を振り返る機会を催すことができましたのは、スワミの愛と恩寵に他なりません。

ガネーシャ様祭壇の設置、スワミの御教え紹介、ラーマーヤナの概要紹介、インド伝来の日本の神々の紹介、インド文化の紹介、文化祭、YOGA、バジャンプログラムのための仮設ステージを含有した会場全体レイアウトの検討、装飾計画、生花・書籍販売・会場受付のマネジメント等、7月初旬から諸準備が本格化し、神戸サイセンターの皆様を中心とする大阪、京都、奈良の関西セヴァチーム、サイ大学の卒業生チーム、東京チームが一体となって実施運営されました。

前々日の8月9日から展示パネルのセットアップや祭壇づくりが始まり、翌日10日には開会式典のリハーサルが行われました。当日は、サンジャイ クマール ヴアルマ インド大使閣下、神戸市長、議員の皆様方もご臨席されるため、神聖さ、奥深

さ、美しさ、楽しさが融和した温かな場となるように、詳細なところまで確認しあい、修正を重ねました。



8月11日、灯火式、VEDAで開会式典が始まりました。VEDA隊は、金沢、北九州で留学中のサイ大学卒業生のみなさんと編成されました。



開会式典はココナッツ割りで終了し、『インドフェア神戸』がスタートし、開催期間の4日間は、毎日のように「インド舞踊」「楽器演奏」「YOGA体験」「アーユルヴェーダ講座」などのインド文化体験ステージが行われ、1日の最後はスワミに愛と感謝を込めて「バジヤン」プログラムで終了としました。



「より良くなるように」から「より良くありますようにへ」

コロナ禍の中、開催計画が練られていきました。会場のレイアウトプランはVer.6まで推敲され、実施前日であっても変更されました。ひとつの出来事を体験している最中は、霊性修行のプロセスの真っ只中にあるため、「より良くなるように」の思いは純粹なものからですが、葛藤や悩みも生じやすく、ある種の痛みを経験します。

8月11日の早朝、展示されているスワミのお写真の前で、「すべてがうまくいきますように…、スワミの愛が広がりますように…、より良くありますように…」と静かに祈りました。込み上げてくるものがありました。即座に「私が送った涙はどうだ？」という声を聞きました。涙にまみれながらも、「あっ、そういうことか！そういうことなんだ！」という気づきがありました。「より良くなるように」の思いには、自我が残存しています。「より良くありますように」の祈りは自我の出口であり、全託の入り口です。その瞬間、すべてが美しく、甘く、荘厳朗らかに輝いて見えました。

すべての導きと気づきを与えてくださったスワミに、静寂の深淵から感謝申し上げます。

AUM SRI SAI RAM

LOVE ALL
SERVE ALL
HELP EVER
HURT NEVER

インドフェア 神戸

2022年

開催日時
8月11日(木祝) 10:30~19:00
12日(金) 10:00~19:00
13日(土) 10:00~19:00
14日(日) 10:00~17:00

開催場所
ハーバーセンター
スペースシアター
神戸市中央区東川崎町 1-3-3
神戸ハーバーランドセンタービル地下1階
TEL 078・341・6039

入場無料

日印文化交流 1270周年
◎ 記念パネル展
◎ インド文化交流体験

◎ 日印国交樹立70周年記念
◎ インド共和国建国75周年記念
◎ 神戸ハーバーランド街びらき30周年記念
◎ 在日インド商工協会設立100周年記念

<https://indofair88.wixsite.com/kobe>

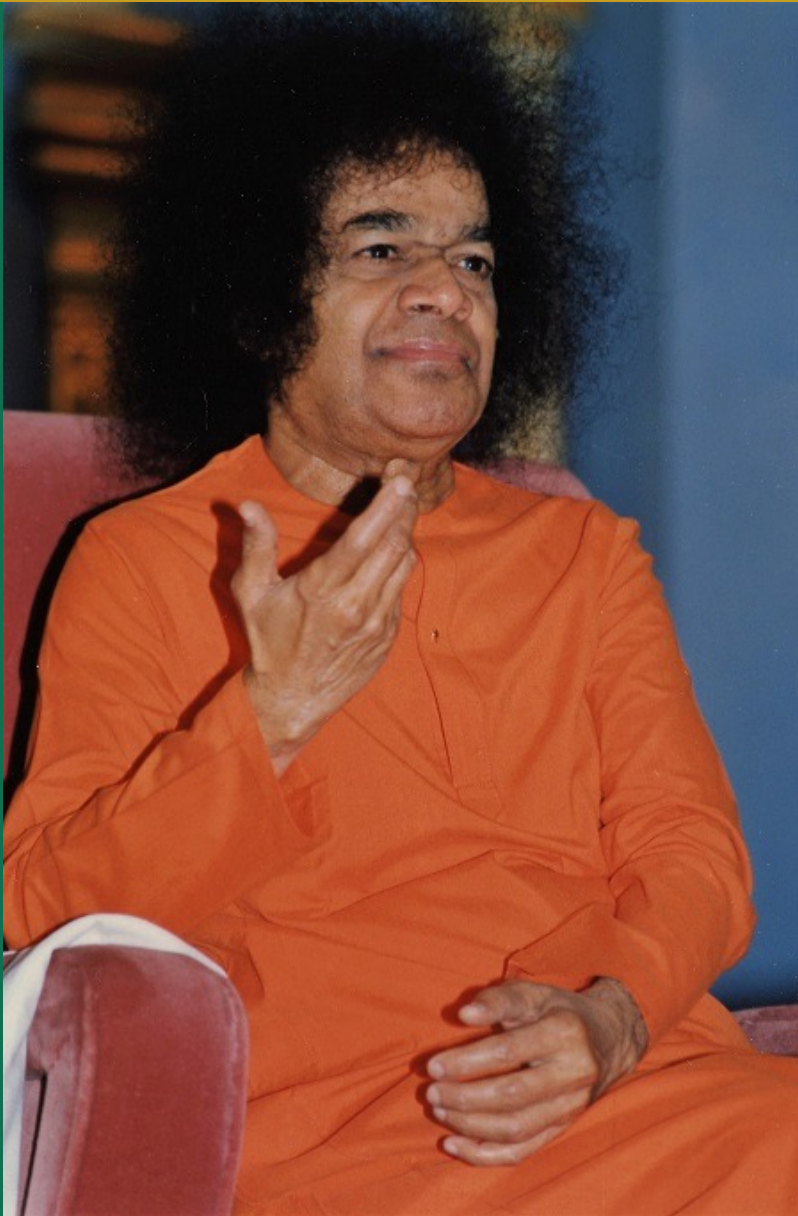
「インドフェア」開催のご案内 入場無料

2022年は日本とインドにとって「日印国交樹立70周年」・「インド共和国建国75周年」記念の大きな節目の年です。そこで、大正10年に設立以来微力ながら経済・文化・観光等を通して日印親善交流に取り組み、設立100周年を迎えた当協会は、日印のさらなる発展・親善を祈念して、この度「日印国交樹立70周年記念 インドフェア」を開催させていただきます。

兵庫県はインド グジャラート州と友好提携を、神戸市は同州の中心地アーメダバード市と経済等に関する相互協力覚書(MOU)をそれぞれ締結しており、また神戸には古くから在日インド人も多く暮らし両国との結びつきが深い場所です。その神戸の中心部に位置し、本年「街びらき30周年」を迎え、ますます発展する街「神戸ハーバーランド」にて、日印交流の1270年の歴史パネル展示会及び古典舞踊・ライブ音楽・ボリウッドダンス・アールヴエダ・ヨガ等のインド文化を楽しめるステージ等、盛り沢山の内容で皆様をお迎え致します。

主催 公益社団法人在日インド商工協会
共催 神戸ハーバーランド株式会社 / 一般財団法人サイヒラインド財団 サティヤ・サイ教育協会
後援 インド大使館 / 在阪インド総領事館 / 兵庫県 / 神戸市 / 兵庫県教育委員会 / 神戸市教育委員会
協賛 ホテルクラウンパレス神戸 / 合同会社ハーバーリース

LOVE ALL SERVE ALL, HELP EVER HURT NEVER
聖者サティヤ サイ ババの御言葉





<活動報告 2>

神戸センターの創立 47周年記念祭を迎えるにあたって



バジャン会の再開の検討

この度の報告を書くにあたり、いろいろな体験を与えてくださりました尊神サティヤ・サイ・ババ様の蓮華の御足に私の愛を捧げます。

皆様ご存知の様に、新型コロナの感染拡大に伴い、全国的にセンター・グループの定例活動は自粛してきました。2020年3月からの活動自粛開始ですから、2年半以上におよびます。

第6次の感染拡大が収束を見せた7月の上旬に、神戸センターのバジャンチームのメンバーの皆さんとオンライン上でミーティングを持ちました。覚悟はしていたのですが、そのミーティングでは多くのことが分かってきました。すでに新型コロナの感染拡大から2年半の歳月が過ぎるなかで、家族の自宅での介護が発生した方、体調管理のため環境の良い郊外に引越しをされた方、転勤で定例的なセンター活動に参加が難しくなった方もありました。そのことは、神戸センターというある程度メンバーが充実しているであろうセンターであっても、現実的にはかつてのようには定例バジャン会の開催をすることすらも難しくなっているということの意味していました。メンバーで情報を出し合い、月に2回のテンプルでの

バジャン会の再開を検討しました。その時点で、なんとか8月28日（第4日曜日）の神戸センターの創立記念祭の日を記念して、バジャン会を再開しようという目標を立てました。勿論、感染拡大防止対策を打ったうえで、月に2回の開催頻度を目標にしました。

「インドフェア神戸」に参加して

この会議と前後して、お盆の時期の8月11日から14日の4日間にわたり、神戸ハーバーランドのオープンステージのスペースシアターにて、インドフェア神戸が開催されました。この催しは、日印国交樹立75周年記念、インド共和国建国75周年記念、神戸ハーバーランド街びらき30周年、在日インド商工協会設立100周年記念と多くの記念日を祝う催しで、兵庫県や神戸市の後援もありました。

そして記念式典ではインド大使、衆議院議員や神戸市長もご挨拶をされました。またその中で神戸ハーバーランドの開発に関わった方々の表彰などもあり、神戸ハーバーランドが今の姿になった歴史的な経緯についても学ぶことができました。その後、文化プログラムとして、インドのヨガ、アーユルヴェータ、古典舞踊、ボリウッドダンスやインドの古典楽器による演奏会が連日行われま

した。

インド文化から新たな視点を得る機会

その中で、出演者の方が言われていたお話が私の心に残りました。それはある意味で、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、日常生活、仕事、センター活動など、多くの自粛を伴う、本当に閉塞感のある今の状況について、私達はどの様に捉えるべきか？その答えのヒントになるお話でした。

インドという国は日本からすると本当に混然一体とした国です。それはインド音楽にも表れていて、一定のリズムで演奏している中に、それとは違うリズムを何小節も続けていき、それが最終的には元の一定のリズムに戻って来たりします。それは音階においても同様で、通常私たちの使用している西洋音階の半音、またその半音まで使用しています。通常でしたら違和感でしかないリズムの崩れや、音階から外れた音程なのですが、それがインド音楽では、生命力や彩（いろどり）となっています。インドという私たちからしたら一見混沌とした国であっても、それらは活力や躍動感になっています。このようなお話を聴いて、私自身本当にインド音楽、インドの哲学に頭の下がる思いでした。

私のようなまだまだエゴの残っている心のフィルターをとおしての理解で申し訳ありませんが、次のように理解したのです。悲しみや苦しみなど、平安な日常に対する不協和音のようなできごと、苦し過ぎて耐えきれそうもないできごとであっても、スワミ※1の御教えにそった考え方で受け取り、感じとり、理解していく中で、最終的にはそれらの悲しみや苦しみは、スワミの御教えによる至福への道程の彩（いろどり）のある景色となっています。自分も強くと理解しました。

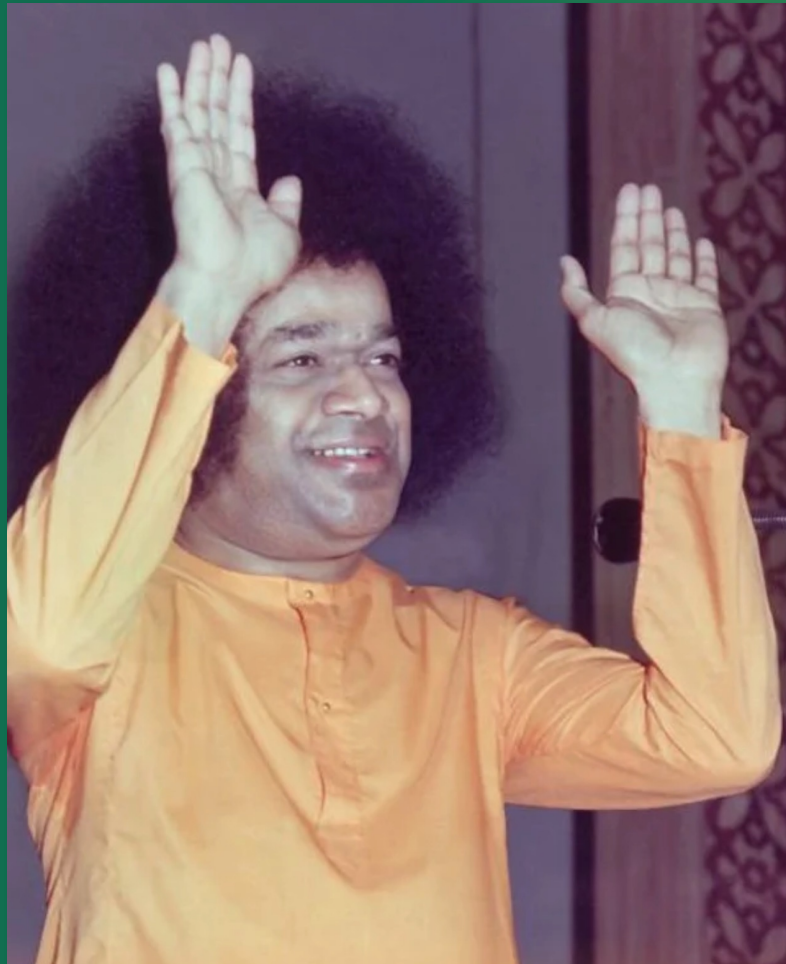
今回の私の体験でも分かるとおり、神様との体験を積み重ねていく中で、移り変わっていくのは私たちの心の在り方、理解の仕方、愛の感じ方なのです。実は、神から私たちに与えられる愛は、真に太陽の様に常に降り注ぐ不変の愛であり、変わらぬ良心という内なる神からの愛の促しなのです。本当に変わっていかねばならないのは、私たちの心の在り方なのです。

新型コロナウイルス感染防止対策の期間の意味をどう捉えるのか？（まとめ）

皆様も十分にご存知のことだと思いますが、私たちの身の回りに起きるできごとは神様から見て、全て私たちにとって良いことばかり起きているのです。自分が強く苦痛に感じるがあると、思

わず「神様！」と心の中で叫びます。「神様！神様！神様！」と本当に必死に語り掛けます。苦痛はある意味で教師だと私は思います。そしてスワミの御教えに照らして考えていくことを続けていくと、その問題が発生した時点で、学ぶべきことを教えてくれることもあります。また思い悩んだ末に、問題が私たちにその理由を教えてくれることもあります。その時点では分からなくても、何年か後から振り返って、その問題のメッセージが分かることもあります。「そうか、あのときの問題は意味があったんだ。あれで良かったんだ」と。依然として分からないままのこともあるでしょう。私たちは、それでも神様に問いかけ続けるのです。ただただ、「スワミ！スワミ！スワミ！」と問いかけ続けるのです。

仏陀様の言われる『一切皆苦』の世界であっても、永遠に続くと思われる苦しみであっても、目に見える、また聞こえる全てのものは常に変化しており、一つひとつの苦しみは形を変え、過ぎ去っていきます。悲しみや苦しみを経験するからこそ、幸せや平安の大切さが分かり、自然と幸せと平安を求めていくのです。そして、スワミの御教えを信じ、学び、実践し、体験を重ねることにより、マーヤー（幻）のこの世界であっても、悲しみや苦しみは、最終的にはその姿を変え、振り返ると全てのことはこの人生に彩りを添えるもの



であると分かってくると思います。すべての起きたできごととは良かったのだと、人生の最後の時点では振り返ることができると思います。それは、正しく私たちの人生における価値ある「彩（いろどり）」となっているでしょう。

尊神サティヤ・サイ・ババ様を現す漢字として「彩の里」などと、「彩（さい）」という漢字が使われていますが、今回の私が学んだ彩（いろどり）というメッセージも、同じ漢字を読み方を変えたものです。スワミはよく御講話で、言葉あそびのような形で真理を伝えることがあります。今回の「サイ（彩・いろどり）」という言葉は私にとって心に響く言葉になりました。

後書き

結局、神戸センター創立記念祭の直前には、兵庫県下の感染拡大はピークに達し、SSIOJの世話人にも相談をしたうえで templeでのバジャンの再開はあきらめることになりました。

戦前に世界的に感染拡大したスペイン風邪(1918-1920)の流行は3年間にわたりました。科学が進み、医療も進展したと思っている現代でさえ、感染症を克服するには、100年前と同じ

く3年間はおかかってしまいそうです。ある意味、無力感さえ感じます。でも、その不安な日々の経験をとおして、私たちディボーター（帰依者）はよりスワミに呼びかけることにより、スワミをより身近なものとして感じるできるようになったと感じています。そしてインドフェア神戸に参加したときに多くのサットサングの皆様と再会したときの懐かしさや、会えた喜びを感じたことも、そしてその大切さも強く再認識できました。特に絶望的な病状から回復された方にも再会でき、その方の笑顔を見られたことにスワミへの感謝が止まりませんでした。

スワミ！本当に素敵な体験をさせていただいてありがとうございます。

みんな、幸せになりますように！

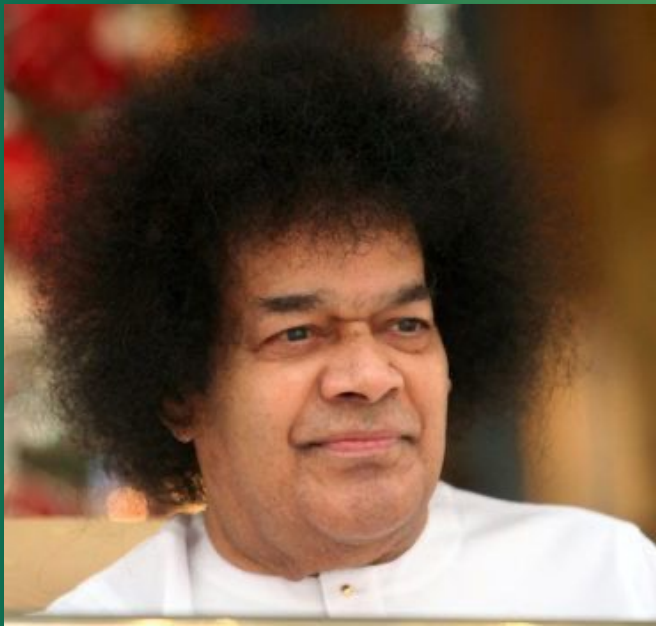
神戸センター 世話人

※1 スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。



<活動報告 3>

スタディーサークル



開催日：2021年7月28日(水)

テーマ：1995年夏期講習シュリーマド・バーガ
ヴァタム（サティヤ・サイ出版協会）より「絶対
的な真実、相対的な真実、非真実」（P45-47）

参加者：57名

質問：

- ① 真実の探求とは何を意味するのか？
- ② 人生におけるすべての問題の克服を助けてくれる「一つの真実」とは何か？
- ③ 皆さんの理解において相対的な真実と真実との違いとは？
- ④ 自分が他者の人生に対して正当に振舞うために、不適切な情報から生まれる幻影をどのように抑制するか？

<参加者のコメント>

「生におけるすべての問題はカルマ（行為の結果）で、行ったことが返ってきていると考えると、カルマの影響を緩和してくれる神様の愛は真実。」

「私は誰なのかという探究が真実の探求であり、真実である本当の『自分』がその探求の対象だと思う。例えば肉体ではない、思い

でもない、心でもない、私は私であると。例えば人間関係でいろいろな問題が起こる。あるいは肉体的なことも含めていろいろな問題を抱える。年を取るとかあるいは肉体が失われるということを含めて全部マーヤー（まぼろし）であり、私は永遠の存在ということを知ることがすべての克服になると思う。」

「以前、好きなものの中にも、嫌いなものの中にも神を見なさいと教えてもらったことがある。『好き嫌い』という自分の感情が、対象の本当の姿を歪めてしまうのではないかと思う。逆に言うとなぜこの人をこんなに好きになったのかとか、なぜ嫌いになったのかということさえも後で考えると全部スワミ※1の恩寵だったと思う。だから本当にすべては神が自分のためにしてくださるものだと思う。」

「例えば、相対的な真実といえ、私は今此処にいらっしゃる方々と比べると相対的に貧困だと思う。でも絶対的な貧困ではないというのが真実。相対的な真実というのは、何か比べるものがあったの概ねの真実。真実というものは比類なきもので、絶対的なもの。スワミが至高の存在ということとは絶対的な真実。」

「まずは落ち着いていたいと思う。できるだけ周りからの情報よりも自分の内側の声を聞けるように、瞑想などを頑張りたいと思う。」

「私は日常的にナーマスマラナ（神の御名の憶持）や瞑想をして、内側に意識を向けようと努力している。通勤時に経験することだが、最近ではコロナ禍で電車に乗っていても皆とても接触に対して恐怖感や不安が多々あって、何か本当に落ち着いていられないという状況があった。私も影響されやすく、ストレスも受けやすいほうなので、自分が病んでいくような感じがあって、以前はとても困っていた。最近では外に出かけるときはバジャン(信愛の歌)を聞いたりイヤホンでヴェーダを聞いたり、神の御名を唱えたりしている。そうすると、外界のストレスや不適切な情報がまったく気にならなくなる。自然とヴェーダやバジャンの音に集中できるし、とても助かっていることが多々ある。それと、自分や他者に正当に振舞うことに関しては、思いや言葉や行動を正しいものに一致させていくことが大事だと思うので、それができるように御教えをしっかりと実践していくことを努力していきたいと思っている。」

<サイの学生のコメント>

「多様性の中に一体性を見ようとするのが真実の探求だという御言葉がある。またスワミは多様性

の意味を『創造が多様性である』とおっしゃっている。すべての創造物はバリエーションに富んでいて、すべてが異なっている。スワミが笑いながらおっしゃったのは、『人が瞑想しているとき、あるいは歩いているときに木々を見たり動物たちを見たりしているとき、それらの中に神を見ることは簡単にできるが人々の中に神を見るのがむずかしい』ということ。私たちにとって一番大きなチャレンジは人々の中に神を見ること。もしそれができたなら、自分自身の本当の性質を知ることとはとても簡単になると思う。」

「自分の体験では、人生の中で家族や友人をはじめ多くの人と緊密な関係をもっていて、多くの方は『あなたが必要とするとき、私たちは近くにありますよ。』と言うが、実際は他の人には自分が本当に助けを必要としているときに、助けに来てもらえない、約束が守られないことだってある。ときと共に関係が変化することもあるが、神様は『私は必ずあなたと共にいますよ』とおっしゃるとおり決して約束を取り下げることはいない。『神はいかなるときも私と共にいてくださる』という神様の決して変わらない約束が、人生ですべての挑戦に直面していく上で助けてくれる。それは神様の一つの御言葉で、真実だと思う。同時に神様がそのように約束してくださっているので、他の誰にも何も期待する必要はないと思わせ

てくれる。神様の約束があるから、他者には何も期待することがないので、他者がどうだからといって自分が傷つくこともなくなる。そして神だけに期待するようになっていく。」

「この点に関して、スワミが御講話で、とても美しく説明してくださったことがある。相対的な真実は、例えば今日は正しい真実かもしれないが、明日はそれは正しいとは限らない。それが相対的な真実だということ。でも絶対的な真実はときと共に変化することが決してないもの。神だけが絶対的に変化しないもの。神様だけが、ときを超えた存在であって絶対的な真実。また『バーガヴァタプラーナ（シュリーマド・バーガヴァタム）』の中でもクリシュナ神※2こそが、ときを超えていて絶対的な真実だということが述べられている。例えばクリシュナ神と牛飼いが、牛たちを森に連れて行って、そこで草を食ませようとしたことがあった。すると森の中ですごく大きなヘビの姿をした鬼がクリシュナ神を殺そうとしてやって来た。そんなことも知らないで牛飼いか牛たちは大きな洞窟に入っていった。その洞窟というのは、実は大蛇の口だった。それを洞窟だと思い込んで牛や牛飼いが中に入って行ってしまったが、クリシュナ神が助けに大蛇の口の中に入って行った。その様子を観ていたブラフマー神※3さえも、クリシュナ神は本当に神なのだろうかという疑念に

苛まれていた。それで、心配したブラフマー神が中に入って行った牛飼いたちと牛たちを皆ブラフマー神の世界に避難させて、そこで眠らせておいた。やがてクリシュナ神がすべての牛飼いと牛がそこに居ないということに気付いた。居なくなってしまった牛飼いと牛たちの姿をクリシュナ神ご自身が彼らの姿をとって、彼ら自身としてそれぞれの家に帰って行った。それぞれの家に帰って、それぞれの家で一年間をクリシュナ神が過ごした。するとブラフマー神がその様子を見て、すべての牛飼いと牛たちが布林ダーヴァン※4にちゃんと皆いる様子を見た。ブラフマー神は皆が布林ダーヴァンで暮らしている様子を目にしてあまりにも驚いた。そして、ブラフマー神の世界で眠っていた筈の牛飼いや牛たちはどうしているのだろうかともう一度そちらを見ると、ブラフマー神が眠らせていた牛と牛飼いたちはちゃんとブラフマローカ（ブラフマー神の世界）でまだ眠っていることを確かめた。そこでブラフマー神がやっと気がついたのは、布林ダーヴァンで暮らしているすべての牛飼いたちや牛たちは皆クリシュナ神だったということ。それでブラフマー神がクリシュナ神のところに行って来て、詫びた。クリシュナ神が言ったことには、クリシュナ神と共に非常に沢山のブラフマー神がいるということ。そして、その沢山のブラフマー神もまた、クリシュナ神自身なのであるということ。ブラフマー神はクリシュナ神に詫びながら、『自分のマーヤーを取り除いてくれ

て本当にありがとうございました。これによって私は本当の真実を見つけることが出来ました』と述べた。そして、それでブラフマー神はブラフマローカで眠っていた元の牛と牛飼いたちを布林ダーヴァンに戻した。このことから分かるのは神だけが真実で、ときや場所、状況を超えた存在であるということ。それを私たちの場合に当てはめると、私たちが見ているすべてのものは本当は神の反映であるに違いないが、そのことに本当に気付くまでの間は相対的な真実になってしまっているということ。すべての創造物は、昨日は本当になかったかもしれないし、また明日あるかどうかは分からない。一方、すべてに浸透している真実というのは、創造者だけが本当の真実であるということ。その真実を探求しなければならない。」

「スワミは既に絶対的な真実を私たちに教えてくださっている。私たちにとっての大きな挑戦とは、スワミがおっしゃっていることを理解して受けとめること。それこそが真実の探求ではないかと思う。年配の方の話で、人生において直面した困難な状況もときを経て振り返ると、それは自分自身がより善い人間になることを助けてくれたと感じているとのことだった。そのような『相対的な真実』に基づいた対処は、その事柄が終わった後になって、経験がもたらす自分にとっての意味を考えるようになる。だからこそいつも心の中に神を

据えておく必要がある。ときの流れとともにすべては過ぎ去ってゆくので、良いこと悪いこと、すべての出来事にポジティブに対処することがより良くなる助けとなると思う。私たちが神様に心から助けを求めれば、必ず応えてくださるのでその様な意味での神の『一つの言葉』を心に留めておくことがとても大事だと思う。」

「例えばあるところに女性がいて、自分が世界で一番美しいと思っていた。話しかけると答えをくれる鏡を持っていたので、その女性は鏡に一番この世で美しい人は誰かと鏡に聞いていた。ところが、鏡は、決して問い掛けている女性が一番美しいとは答えなかった。それで女性はとても怒って、その女性が一番美しいわけではないと答える鏡を片っ端から全部壊した。自分が鏡を沢山壊したせいで、その女性の手からも血が流れていた。そして、そうしているうちに彼女もとても年をとってしまった。これはある意味において私たち皆に起きていること。私たちは、多分真実とはきっこうだろうと、何か思い込みとか仮定をもっている。私たちはこの生きている世界が真実だと思い込んでいるが、実際はそうではない。私たちが信じていることころの『真実』が、そのとおりの所にやって来ないと自分自身を傷つけることになる。でも真実というのは、バガヴァン シュリ サティヤサイババだと思う。」

「正義を行うということがキーワードだと思う。ときには私たちは自分を律する行動をしようとして、その代わりに他者を傷つけたり、悪く振る舞ったりすることがあると思う。一つ留意すべきは、私たちは他者の人生に対しては何の権利ももっていないということ。他者に対して何かを提案することはできるが、強制することはできない。スワミは、『あなた方は他者に親切にできないときがあるかもしれないが、そういうときは親切に話すことはできる』とおっしゃっている。だから、どんなニュースに対しても過剰に反応しないこと、他者を傷つけないこと、少なくとも丁寧に話すようにすることが大事だと思う。こういったことを留意することが、間違ったニュースが拡散することを防ぐことになると思う。」

ババ様の御言葉

「真実を探究する」とはどういう意味でしょうか？ 真実に至る所に存在するのだから真実を探すことは無意味である、と異議を唱える人もいます。例を挙げましょう。人は自分の目で、母親、娘、姉妹、妻、姑を見ます。見る目は同じです。さて、各々の場合に使われる感情を「探究」して見ましょう。目を持っているだけでは十分ではありません。皆さんは、「自分の母親をどのように見ているか？」を自問しなければなりません。答えは「優しい思いで見えてい

る」です。これが「真実の探究」です。ただ、目と同じであるという理由だけで、すべての人を、同じ態度で見ることができのでしょうか？ 視力は同一であっても、根底にある感情は異なるのです。同様に、感官は同じですが、各自の感覚はそれぞれ独自の能力と限界を持っています。真実の探究とは、サッティヤム（真実、真理）と、ニジャム（相対的な真実や事実）と、アサッティヤム（非真実）を識別することです。

シュリーマド・バーガヴァタム

- ※1 スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。
- ※2 クリシュナ神：ヴィシュヌ神の化身、ドワーパラユガにおける神の化身。純粋な愛の具現。
- ※3 ブラフマー神：梵天、創造を司る神
- ※4 ブリンダーヴァン：クリシュナが子ども時代に牧女たちと戯れたウツタル・プラデーシュ州にあるヤムナー河のほとりの緑豊かな村。

日時：2021年8月1日（日）

テーマ：1995年夏期講習シュリーマド・バーガヴァタムより「実践」について

参加人数：50名

質問：

- ① 理論的知識を実践的な状況にどのように適用できるか？
- ② 他者への好ましくない思いをどのように愛に置き換えることが可能か？
- ③ 奉仕は愛を増幅する最善の活動であると同時に、エゴやプライドに結び付く場合もあるが、後者をどのように避けることができるか？

<参加者のコメント>

「目の前のものを神様と思って優しく接して意識したとき、すべての中に意識があるので語り合える気がする。」

「ナーラーヤナ セヴァに初めてサイセンターで参加したときはナーラーヤナ様（ホームレスの方）と手が触れそうになったときに心の中で汚いと思ってしまったのがショックで『なんて酷い人間だ』などと思った。それからその方の中にいらっしゃる神様に捧げるように努力しようと思い、

おにぎりを作る準備から神様を想い、少しずつ努力するとホームレスの方を汚いと思わなくなってきたので良かった。やはりセンター活動では一人ではなくたくさんの人と団体にセヴァをする場所が与えられることはとても有り難い。」

「センターの方々の姿勢を見ていると、一つひとつに愛を込めているのかなと感じ、人に奉仕するという行為の中で、周りの方々から学ぶことがある」

「五感を制御できるように御教えを思い出したり、ババがされてきたことを本を読む中で思い出したり、感銘を受けたりすることでだいぶ変わってきた気がする。実際に職場で、話が噛み合わない場合でも、何か共通点を見つけ出すと、上手く話ができるようになったりする。自分を見直すことが一番だと思う。いつも微笑みを浮かべて相手の方に接していくと何も話さなくても、笑顔で挨拶ができるようになったりすることもある。笑いとか微笑みの中には調和が生まれる。」

「自分の内側を愛で満たしていくように変えていくしかない。私自身が友人に対して、非難するつもりもなく軽口を言ったという経験があって、それ以来絶交された。手紙を出したり詫びたりしても、一切連絡がなくなった。そのことに対して、なぜ許してくれないんだという思いをずっと持っていた。

あるときふと、その友人が許してくれないのではなくて、許してくれない友人を自分が許していなかったことに気付いた。やはりすべては自分の内側の反映にすぎないと思った。自分の内側を愛一杯にしてスワミと一緒に生きていれば、どんなことがあったとしても自分に許容できることではないかなと思う。」

「本当に好ましくない思いをもったのは自分自身の問題であって、他人がどうであっても関係がなく、真実の愛に変えていく努力が必要なのかなと思った。」

「いろいろなサイの奉仕や活動をするときは、必ず神に捧げ、オーム（原初の音）3唱をして始める。しかし段々と周りの人たちと比較したり、結果を求めたりするようになる。バジャンでは、最初はスワミを思ってバジャンをしても、だんだん他の人と比べて自分はちゃんとできているのかと結果を考え出したり、他の人に目を奪われたりするとエゴやプライドに結びついていってしまう。バジャンを歌うときはスワミの写真をじっとずっと見て歌いなさいとご指導を受けたが、やっぱり神ということを忘れずそこに帰ることが大切。」

<サイの学生のコメント>

「私たちはスタディーサークルでいろいろな知識を得たのなら実践をしなければならない。スタディーサークルで学んだことが実践されて初めてサークル（円）が完成される。そのためには識別力を必要としている。実際に何かを行う前によく考えなければならず、行動や思いが、私たちが神様に近づけてくれるものかどうかを考え、調整しなければならない。スワミの御教えを行動に移すときに心には必ず平安が生まれる。行動をとおして神に近づくことができているか？その指標は、心に平安が得られているかどうかという点。私たちはしっかりとグル（霊性の師）にしがみつきながら究極の真理を知るために努力していく必要がある。そういった知識を実践するときには愛という原理に従う必要がある。そして社会への無私の奉仕の原理がある。それをとおしてより幸せになっていくことができる。そして幸せな人とは思いや言葉と行動がしっかり一致している人。それには一日中、神に対してずっと感謝していただけることだと思う。スワミの数々の御教えを実践することが私たち自身を幸せにして、私たち自身がそのように感じることを神を幸せにするのだと思う。」

「私たちはいつも物事をより適切なやり方で行うべきだと心の中で確信しているべきだと思う。ある聖者は、女性と結婚しないと誓いを立てていた。そして人生の中で現金に触れることがなかった。その聖者は、お金を触ったり女性を見たりした場合には、その後24時間断食することを自分に課しており、そうすることで自分の心に『そういうことはしてはいけないよ』と教え込んだ。私たちが最初にすべきことは自分を正しい道から逸らせる問題は何なのかを明らかにすること。解決策を具体化しておくこと。そうしたやり方が自分のもっている知識を実践に移すための方法だと思う。」

「この2番目の問いと関係してスワミが御講話でおっしゃっていることの一つに、愛というものが5つのヒューマンバリューズ（人間的価値：真理・正義・平安・愛・非暴力）のすべての根底を流れているということがある。そして、愛さえ実践することができれば最も高い霊性のゴールさえも達成できるというものだと思う。神以外の愛は、たとえ母親の愛でさえも多少なりとも条件付きの愛。神の愛だけが無条件。そして神の愛に私たちが気付いて悟るのであれば、それを皆に配らなければならない。そして愛を拡げるということは必ずしもいつも微笑みかけた場面だけを指すのではない。愛を実践するために、きつく辛く当たらなければならない場合も含むと思う。例えばスワミも、多くの学生や他の帰依

者たちが様々な過ちを犯したりしたことに対して、あたかも怒っていらっしゃるように振舞われたりする。スワミがおっしゃるのは、自分は怒っているように振る舞うこともあるが、すべて本当に愛だけからそうしているのだということ。お母さんもとときどき子供が何かしでかすと、叩いたり、怒った声で注意をしたりということがある。もし私たちが誰か他の人を罰さなければならない状況があったときには、愛から罰する場合にのみ、それはダルマ（正義）的なものになる。ときどき人々が私たちにとって不都合な振る舞いをしたり、そういった場合に彼らに対して怒りの思いをもったりすることが起こり得る。自分の場合は怒りを感じたときには、とにかくあまり喋らないようにする。そして、その起こっている状況を論理的に分析しようとする。そして、日が替わる度に、その日は新しい日だと考えるようにする。スワミも、昨日起こった出来事は、次の日がどういう日かを決めるわけではないとおっしゃっている。毎日愛を実践するための実践的な方法としては、許しというマントラ（真言）を毎日唱えていくことだと思う。スワミが美しくおっしゃったのは、愛は与え許すということ。逆もしかりで、私たちが許しということをも身に着けていくことができれば、次第に愛というものが増していくことになる。」

「私たちは他の人々をいとも簡単に判断したりする。たいていの場合、私たちは私たちが判断している人がどんな状況にあるかという物語をすべて知らない。その人のことを完全に理解していないと、その人のことを判断することはできない。他者を判断してはいけないもう一つの理由は、皆成長の過程にあるということ。霊的にも、精神的にも、毎日毎日成長している過程の中に皆がいるから。例えばあまり丁寧な話し方をしない人もいて、少しぶっきらぼうな話し方で反応する人もいるかもしれない。でも、そういったときにも自分たちは丁寧さとか愛をもって、これが私たちが話すべきやり方だということを示すべきではないかと思う。もちろん、その人が何かそういう問題に陥った以前の出来事を知っていることも、知らないこともあるかもしれない。そういった状況によらず、愛によって助けるということだと思う。誰かがぶっきらぼうに、無礼に話した場合には、あなたはもっとこのように話すべきではないか、などと正そうとすることもあるかもしれないが、人間が人間を変えようとすることは不可能だと思う。その人が思いそのものにおいて成長しない限りは、人が人を変えることはできないことだろうと思う。そしてそのような変化は、何かによって直ちに起こるのではなく、すごく時間をかけて起こるものなのだと思う。私たちにできる唯一のことは、その人が変われるときまで待つということと、私た

ちの受容性を高めるということ。何度かの試みを繰り返しても、その人が変わることができない場合には、そういう人から距離をおいたりもできる。そしてスワミにその人の面倒をみてあげてくださいと祈るとのことだと思ふ。他者に過度に反応したりするといろいろな憎悪などを引き起こすやり方になるので、あまりスワミがお好きではないやり方だと思ふ。」

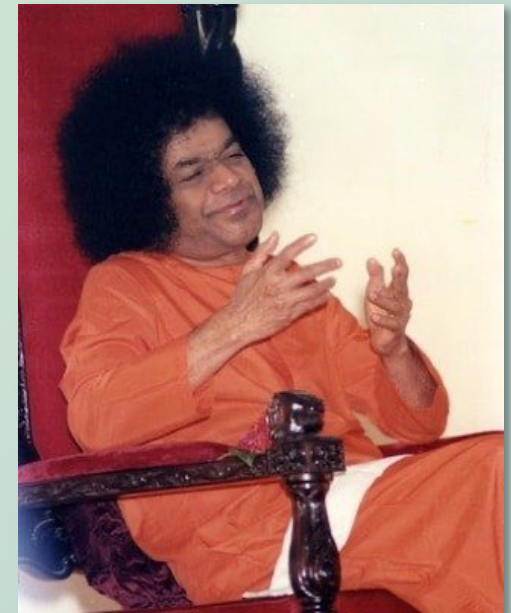
「自分にとってはバジャンを歌ったり奉仕をしたりということは、自分が神とつながることができることと特に感じる。奉仕の本当の目的は何か。私たちは皆奉仕とは良い仕事をするということだと思ふ。しかし、スワミは御講話でセヴァというのは良い仕事をするということではないとおっしゃっている。他者に良いことをしているという態度はポジティブではないとおっしゃっている。正しい態度とは、すべての私たちが行う仕事は神の仕事であるというものの見方をすること。本当にセヴァというものがいかに大事かということスワミがおっしゃるときに、巡礼と比較しても、例えば神の御名を唱えることや経典を学ぶことと比較しても、生と死のサイクル（輪廻の海）を渡ることができるのは、必要としている人にセヴァをすることによってのみということ。私たちは敬虔な人、そして必要としている人を助けるべきだということ。スワミが、敬虔な人々、必要としている人々を助けなさいとおっしゃ

るときに、では、敬虔な人々とはどの人たちのだろう？本当に困っている人とはどの人なのだろう？単純にお金を渡すなどの行動を起こす前に、なぜその人はお金を必要とするのかを考えなければならぬ。その人が食べ物を必要としているのなら食べ物をあげることができるし、着るものが必要なら着るものをあげることができる。人を助けなければならないときには、スワミはいつも、誰を助けるのか、どこで助けるのか、どのように助けるのかをお聞きになる。それが本当のセヴァだと思ふ。エゴやプライドをどうやって避けるかということについて、多くの場合は、私たちの側が与える側で、受け取り手が受ける側だと考えがちだが、私たちが考えるべきなのは私たちは召使いであり、だからこそ奉仕するべきだということ。このことは、私たちがあなたの召使いでいさせてください、あなたの召使いでいることで私を忙しくさせておいてくださいという祈りによって理解できる。奉仕の目的こそエゴを取り除くためのものエゴイストは決して奉仕をすることができず、真の奉仕者とはエゴがない人のこと。」

ババ様の御言葉

犠牲、奉仕、他者の喜びを分かち合うこと、他者が悲しみに暮れているときに慈悲をかけること——これらは、ゴールに到達するという困難な仕事に向けて、個人を浄化して準備を整えさせる美德です。個人という限定された意識を、神の栄光という無限の領域にまで広めなさい——これは、時の回廊に鳴り響いてきた神命です。

1969年11月20日



2021年8月5日(木)

テーマ：1995年夏期講習シュリーマド バーガヴァ
タム (サティヤ・サイ出版協会) 「自分の義務を果たしなさい」 (P52-)

参加者：55名

質問：

- ① 人間の人生の価値の尺度とは？
- ② いつ、どこで、どのように神様から何を求めるか？
- ③ 願いごとを神様にお願ひするときに、どのような識別が必要だろうか？

<参加者のコメント>

「高潔な行為と理念で聖化されたときに初めて人生が有意義なものになるとのことなので、ダルマ（正しい行い）に従った徳のある行為が人生の価値の尺度であると思う。」

「人として生を受けたことは、すべての人に内在する愛を培うことが答えだと思う。さらに、サイの帰依者であれば当然スワミ※1への愛を培うことだ。人はいずれ死ぬ。そのとき、神に対して培われた愛の深さが問われるのではないか。神への愛が起因と

なって生活の中での行為が神への捧げものとなる。それが人生の花道になるのではないかと思う。」

「スワミは『衣食住を保証します』とか、『帰依者の祈りを隣で聞いていて叶える用意ができています』とか、『いつもあなたのそばにいます』とおっしゃっているので、何かを求め祈ることをあえてしない。世俗的なことを求めてしまって自分が苦しいときに、神様だけを愛することができるようにと祈ることがある。」

「まだスワミを知ったばかりの頃には物質的なこと、世俗的なことを祈っていたが段々と変わってきた。今は、二つの選択肢があって迷ったとき『ハートの声を聞かせてください。どちらが神様にとって喜んでもらえる道なのか教えてください』と神様に祈ることだ。」

「スワミのダルシャン(聖者や神を拝見すること)を受けて、何度か手紙を受け取ってもらったことがある。スワミが満面の笑みをくださったときは、その手紙の中に私自身の当時の一番大きな悩みを書き、自分の意見はこういう意見をもっているが、でもスワミが一番良いと思うことをどうぞなさってくださいと書いた。結論から言うと、私が思っていたこととは全然違う思いもしなかった

方法で、その願いごとはさらに何倍も素晴らしい叶い方をした。スワミは自分の思い以上に最善のものを与えてくださるので、スワミにお任せするという形が良いと思う。」

「前にもスタディーサークルで教えて頂いた中でMANの意味はMはマーヤー（幻想）を捨て去ること、Aはアートマ(神我)、アートマの意識を経験すること、Nはニルヴァーナ（解脱）という意味だった。そのように、マーヤーを捨て去って世俗の執着を捨てるのが大切だと思うので、識別、誠実さが大事だと思う。」

<サイの学生のコメント>

「人間の人生の価値の尺度は自己犠牲にあると思う。自己犠牲は無条件の愛からなっている。例えば母親は子供にどれほどの犠牲を払っているだろうか。また社会のあるあらゆる関係にも犠牲が常に存在している。しかし犠牲という言葉を知ると、それによって自分に属していた何かを失うことが連想されがちだ。プッタパルティ（スワミの生誕地であり本拠地である町の名前）のMBAコース（経営学修士号）の中には、一つの授業科目として人事管理（man management）というクラスがある。スワミの御教えに基づいて、学生たちが人

間をどのように扱うのかを学ぶクラスになっている。その授業に関係したお話の中でスワミは『犠牲』という言葉の敷居を下げて、『調整する』という言葉に置き換えられた。例えば誰かが私に何かをしてくれるとき、その人は『調整する』ことが必要となる。社会の中でいつも幸せでいるということは、どのように『調整する』かに関わることだと思う。いかに上手く振る舞うことができるのかが、スワミがおっしゃる『どのように真の尊敬を得ることができるのか』と関わっていると思う。ここでいう尊敬は、自尊心のこと。私たちは他者を尊敬を持たずに見るのではなく、そこにクリシュナ神※2やラーマ※3、あるいはスワミがいるという姿勢を持っていなければならない。周囲から尊敬を得るための人工的な振る舞いであってはならない。すべての人は、正しいか間違っているかを識別できる力をもっている。何かの振る舞いを行った後で、私たち自身を尊重できることが本当の自尊心だと思う。何か行動した後で、自分の奥深いところでは『これはやはり悪いことだった』とハートでは分かる。マインドもまた強烈なものなので、『いや、やはりこれは正しいのだ』と言い出すことがある。自分自身のハートの声を大きくすること。自分が何か間違ったことを起こしたときに、『それはやはり間違っていますね』という内側からの声を大きくしていくこと。そうできてきて本当の尊敬を得られるのではないか。そしてスワミを自分の目で見ることができるようになって

いくのではないか。』

「人間の人生とはその中において魂が絶対的な真理を知るようにすること。2番目の質問のどのように尊敬を得るかという点は、すなわちどのように神の愛を得るのかということ。例えば、人は快適な生活のためにお金を稼ぎ、銀行口座に預金できたかを確認している。同様にハードワークを神に捧げることによって、恩寵の預金を確認して行動していかなければならない。そのためには道徳性、周囲との統合的な人生を送らなければならないと思う。自分自身が善い行いを行っていくことではないだろうか。クリシュナ神はアルジュナ※4に『人はその人生をヴィシュヌ神※5への犠牲を捧げるやり方で生きていかなければいけない』とおっしゃった。この話の中で犠牲とは、自分の悪い性質を捨てることを意味している。なぜなら、もし自分の悪い性質を捨て去ることができなければ束縛が解けることもないからだ。」

「自分の力だけではできそうにないときに神様に祈る。この御講話の中でスワミは『あなた方が願えば願うほど心は状態が下がる』とおっしゃっている。神様に小さなことを一つひとつすべてお願いする必要はないと思っている。いろいろな状況に直面したとき、自分の能力に応じた、正しい

行いをすれば良いと思う。願いの結果はさておき、与えられた能力に応じてその状況に直面していこうとすること。幸運にもお願いをする機会を得るのであれば、神様に対してのみすべきだと思う。例えば、もし私たちが神様に願い事を祈ったのであれば、場合によっては執着心を強めてしまう可能性があるかもしれない。だからその一方で、無執着心をお与えくださるよう祈ることもすべきだと思う。」

「スワミがおっしゃるにはギフトを4人の人から貰っても良いとおっしゃっている。まず両親、そしてグル（霊性の師）と神。この4人の中でもたった一人だけ私たちの欲しいものを何でもお願いしても良い人がいる。それが神様。例えば象が池にはまってしまって、そこにワニがやって来た。その象は全力でワニと戦った。その状況の中で象は『自分はもう何もできないので、助けられるのはヴィシュヌ神だけです』と完全な全託のお祈りをした。するとすぐにヴィシュヌ神が助けに来てくれた。私たちが望まなければならないのは神様ご自身だということ。どのようにそれを望むかといえば、完全な信仰の内に全託してそれを望む必要がある。」

「パールヴィカス（子供の開花教室）で習ってきたことは、あなたがどんな欲望をもっていたとしても、神様に対してだけそれを出してくださいということ。『神様、これが必要です、神様助けてください』とシャイにならず何でもお願いしたらよいと学んできた。そのように自分の場合は、『私はこれが欲しいとか、こういうことで助けて欲しい』と、いつもスワミに話すことで会話のようになっている。そんなやり方で、神様にあらゆるものをお願いしている。それが物質的なものでも、霊的なものであったとしても。もし、特定のことだけを神様にお願いしなければいけないと思っていられっしゃる方がいたら、私のやり方や考え方が違ってすまないが、私はそのようにしている。スワミは私たちから離れた存在ではなく、私たちの中にいらっしゃる存在なので、そうしている。」

「両親に対しては、あれが欲しい、これが欲しいと何でも願います。子供の頃はそうだったが、自分が大きくなってくると願うことはだんだん減ってきて、なおかつ願うことはより意味があることになる。私が子供の頃、おもちゃの二輪車が欲しいと言った。10代になったらバイクが欲しいと言うようになった。同じように世俗的な望みはマインドによって導かれる。マインドがもってくるような世俗的な願いはとても一貫性がない。ときにはマインドによって非常に多くの願望が生じることが

ある。多くの人が、心というものが世界全体の基礎なのではないかと言っているほどである。確かに心はとても強力なものだが、それは源ではなく、本当の源はアートマである。すべての物が常に変化している中で一つだけ変わらないものがある。それは統合意識。それはプラグニャーナ（覚醒意識）に他ならない。プラグニャーナム ブランマー ※6の詩句を思い出すことができる。ブラフマンは至高の意識であるという意味。それを理解するのであれば、すべてのもの、すべての人の中に同じアートマがあるということが分かる。例えば草やポットなどの様々な違う物質があっても、それらの反映はすべて同じもの。いろいろな形態は違っていてもすべての中に同じアートマがある。したがって、私たちが何を願うのか、願いを識別する必要がある。例えば『世界全体が幸せでありますように』とか、それをさらに推し進めると、『社会全体が解脱を達成しますように』という祈りもある。そしてこのような願いを本当にもつことができるのは、私たちが世俗的な願望をすべて捨てた後のことだと思う。」

ババ様の御言葉

金やダイヤモンドに価値を与えるのは誰でしょうか？人間に他なりません。なぜ、皆さんは都会の小さな土地を買うために、多額のお金を支払うのでしょうか？その土地には人間が付加した価値があるからに他なりません。残念なことに、今、あらゆるものに価値を与えている人間が、自分自身には価値を与えていません！これは人間の価値が軽視されているからです。体には、何の価値もないということを悟りなさい。すべての人は五大元素で構成された体を持っています。体は、高潔な行為と理念で聖化される時、初めて有意義なものとなります。たとえば、ガラス瓶は薬味やピクルスを何ヶ月も保存することができます。けれども、皆さんがピクルスを食べると、ピクルスは体内では数時間すら保存され得ません！ですからガラス瓶は体よりずっと優れているのです。覚えておきなさい。社会でのあなたの評判は、容貌や人柄や財産ではなく、あなたの振る舞いによって決まります。もし美德を堅く守るなら、自然と尊敬されます。敬意を要求する必要はありません。

1995年夏期講習シュリーマド バーガヴァタム

- ※1 スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。
- ※2 クリシュナ神：ヴィシュヌ神の化身、ドワーパラユガにおける神の化身 純粋な愛の具現。
- ※3 ラーマ：トレーターユガにおける神の化身、美德と正しい行いにおける最高の模範。
- ※4 アルジュナ：『マハーバーラタ』の主人公とも言える英雄。パンドヴァ兄弟の三男。
- ※5 ヴィシュヌ神：宇宙を維持し守護する役割を担っている神。
- ※6 プラグニャーナム ブランマー：格言。プラグニャーナ(覚醒意識)はブラフマンである。ブラフマンは不断の般若なり。

2021年8月11日(水)

テーマ：1996年夏期講習ラーマヤナ P8-10

「感謝の必要性」について

参加者：54名

質問：

- ① 人間の人生における感謝の重要性はどこにあるか？
- ② どのような意味において、感謝はラーマ※1の人生を総括したものとなっているか？
- ③ 感謝を示すことはどのように皆さんの人生に影響を与えているか？個人的な体験は？

<参加者のコメント>

「母親は戦争を経験していて、本当に貧しい日本を経験しているので感謝が身についている。いろいろなところでお祈りをしたり頭を下げたり、食べ物を大切にしたり感謝が根付いている。それに比べて自分自身はスワミ※2を知ってから感謝の自覚ができた。食べるもの一つでもいろいろな命の犠牲によって成り立っている。」

「感謝をすればするほど、すべては神様から与えられていて、とても幸福な人間なのだと思います、幸福感が増していく。」

「ラーマの存在自体が、感謝とか愛の権化のようなものだと思う。感謝できることは本当に素晴らしいものだと思うし、愛が養われてきて初めて感謝の気持ちが湧いてくると思う。ラーマには最初からそれが備わっていて、どんなことがあっても、感謝を忘れずにダルマ（正義）として実践されたことが、ラーマの人生の総括になっていると思った。自分が平安な状態で、心に愛や調和があるときに、本当に心からすべてのものに感謝ができるのではないかと思う。」

「ラーマ物語を読んだとき、ラーマは国家や国民、ハヌマーン※3や周りの人々、ラーヴァナ※4にさえも感謝している印象を受けた。」

「東京オリンピックでボランティアの人たちが世界一素晴らしかったという、選手たちや外国メディアの方々の声があった。ボランティアの方々が『来てくれてありがとう』などのおもてなしや感謝を示したり、献身的に働いたりしたことが報道されて素晴らしかった。それを聞いているだけで、自分はすごく嬉しくなり幸せになって感動した。だから感謝を示すということは人を幸せにすることができるし、自分も幸せになることができる。」

「数年前から稽古でピアノを習っているが、何年たっても上手にならなくて、音楽の神様から嫌われているのだろうと思っていた。しかしここ一、二年くらい、ピアノの稽古をする前に、女神様の写真に手を合わせてオーム（原初の音）3唱をして、終わった後も「オーム シャンティ」を唱えて『稽古をさせてもらえてありがとうございました』、と女神様とピアノに感謝するようにした。そうすると、こうして毎日音楽と関われるということ自体がもしかすると私はすごく祝福されているかもしれないと考えが変わってきた。やはり感謝をしていくと、思いもだんだん変わってきた。やはり物事をする前には、オーム3唱をし、神聖な気持ちで始めて、「オーム シャンティ」を唱えて感謝で終わるということはとても良い影響を与えてくれると思う。」

<サイの学生のコメント>

「なぜ感謝が必要かという、私たちの進歩に貢献してくれるからだと思う。同様に私たちが直面する困難な状況にも感謝していくことが必要。それを体験していくことによって私たちを作り変えてくれる。感謝は私たちの中にポジティブな思いを与えてくれるのでとても大事だ。感謝は無私な行動であり、それにより他者を許すことができるようになると思う。人生で感謝を実践によって、私たちの中に楽観性や幸福感を植え付けることができる。私たちがこ

の人生に感謝しなければいけないのは、この人生をとおして善いカルマを行うことができるから。例えばホームレスの方を見かけたとき、その方の過去のカルマ（行為の結果）だと単純に思うこともある。放っておこうと思うことがあるかもしれない。でもそのように考える代わりに、神様が奉仕する機会を与えてくれることに感謝するという思いに置き換えた方が良いと思う。感謝は私たちの中でダルマ（正義）のバランスを取ることに役立つと思う。」

「今日の御講話の部分では、感謝するのは人間の義務であるというスワミのお話があった。人の人生がどうなるのかは、感謝によるのではないかと思う。私たちが社会の中でどういう立ち位置にしようとも、感謝を持っていることが必要。同時に思い出させてくれるのは、この人生の中で私たちが本当に所有しているものは何もないということ。社会に貢献することができることも、神から贈られたギフト。社会に奉仕する機会が与えられていることに対して神様に感謝しなければならない。バガヴァットギーター※5の中のシローカ（詩節）で、クリシュナがアルジュナ※6に『あなたが生まれたときには何も持たずにやって来た。そして今あなたが所有しているものは決してあなたのものではない。今あなたが持っている何かを

失うかもしれないと恐れる必要はまったくない』と言った。元々持っているものは何もないと考えたと、たとえ何かを失ったとしてもそれによる心へのインパクトが少ないものとなる。このような点が感謝という考え方から利益を得られるポイント。」

「今回の御講話を読んで、二つのコンセプトについて学ぶことができた。一つ目のポイントが感謝で、二つ目のポイントが義務の部分。一つ目はやはりすべての人に対する感謝の念を培っていかなければならないということ。では、『すべての人』というのは誰だろうか？例えば、スワミがおっしゃるには、私たちが生まれてから死ぬまでの間に非常に多くの人々の奉仕を受けて生きていく。生まれる日には、お医者さんや看護師さんたちにお世話になる。そして私たちを育てていく母親の奉仕を受ける。そして、その後は先生方の奉仕を受けることになる。そして私たちのために食物を作ってくださる農家の皆さんのお世話にもなる。私たちの人生のどんな局面においても、常に社会にいる誰かの奉仕を受け続けることになる。では私たちはそういうすべての人に対する感謝をどのように示せば良いのだろうか？それはただ私たち自身の義務を最大限に行うこと、それによってのみ社会に感謝を示すことができる。ラーマはまさにそのような意味での義務の具現だった。

ラーマが人生をとおして行ってきたことをみるのであれば、すべてのラーマが行ったことは、そのような義務に満ちたものだった。例えばラーマが森へ喜んで行ったのは、それが本当に父親への感謝を示すための義務であると考えからそうした。ラーマがスグリーヴァ※7を取り戻したのも、それが王としてのダルマだと考えたから。またラーマが、ジャターユ※8が息を引き取るときに葬儀をちゃんと行なったことも、ジャターユに対して感謝を示すのがラーマの義務であると考えたから。さらに、シーター※9との結婚の場面においても、シヴァの非常に重い弓を持ち上げたが、そのときラーマはグルのヴィシュワミトラ※10からそのことについて助言を受け、『その弓を持ち上げることを自分の義務として行ないなさい』と教えられたことを実践した。その後アヨーディヤー（ラーマの生誕地）でラーマが戴冠して王として戻ったときには、それまでラーマを助けたすべての猿などに対して感謝を示した。そしてランカー※11への橋を作るのを助けたシマリスのエピソードは多くの皆さんもご存知だと思うが、ランカーへの橋を造るときにそれを助けた猿たちはものすごく力強い猿たちで、大きな石を運んでは海に沈めていた。そして同じその仕事を手伝っていた小さなシマリスがいた。シマリスは先ず砂に自分の体をなすりつけて、体に付いた砂を海で洗い落して橋を作るのを手伝おうとしたというエピソードがある。ラーマはこのことをよくご存知で、シマリ

スを手に取り、シマリスをラーマが愛おしそうに背中を3回撫でた。伝説として言われていることは、シマリスの背中には黒い三本の縞がついているが、それはラーマがそのように撫でることによって縞を付けて、外敵から守るためにそうしてくれたということ。このように眺めてみると、ラーマが人生で行なったすべてのことは、感謝を誰かに示すための義務としてすべてが行われて来た。そして私たちがそのように義務を示すのであれば、それはすべての人に対する義務であるべきということになる。」

「ラーマが自然に対して感謝を示した幾つかのエピソードがラーマヤナの中にある。例えばラクシュマナ（ラーマの弟）がラーヴァナに殴られたときにラクシュマナが意識を失ったことがあった。そのときにハヌマーンがヒマラヤへ行って、薬草を持って来てくれたが、どれが必要な薬草なのかを分からなかったので山ごと持ち上げて持って来てしまった。ハヌマーンがその仕事をした後で、ラクシュマナも意識を取り戻し、その後ハヌマーンはその山を元の場所に戻してくるように言われた。ヒマラヤの山をちゃんと元に戻すということは、そういった形で自然に感謝を示すこと。そのようなこともラーマヤナの中で教えられている。自然をただ利用するだけではなく、自然の原初の姿を護っていくということも私たちの義務

であるということが、そのような形で語られている。もう一つはすべての人に対して同じように感謝をするというポイント。動物、人間、あるいは羅刹に対してだとか、それらを一切区別しないで感謝するという。例えばラーマが14年間森にいたときに、ラーマがガンジス河に辿り着く前に馬に出会った。馬に乗って目的地に着いたときにグハという人がその地域のリーダーだった。グハは釣り人だったが、その釣り人がラーマが河をわたるのを助けた場面があった。そのときラーマが王様であるということを知っていたので、その釣り人はラーマに、家に来て食事を召し上がって欲しいと言った。しかし、ラーマは自分は今は森に隠遁している放棄者だから、どの村にも立ち寄ることはないと言った。でも私を乗せている馬はお腹を空かせているだろうから、その馬に食事を与えてやって欲しいと言った。そのようにラーマご自身は食事を召されなかったが、ラーマが乗っていた馬に食事を与えて欲しいと頼んだ。そのようにラーマヤナには、他にもたくさん例があるが、本当に他者を助けていくことによってゴールが達成されるという物語。ラーマは最後にジャターユの葬儀を行った。多くの猿がシーターを探しに行って南インドで立往生してしまっていたときに、ジャターユの兄弟であったサムパティは、（ジャターユからラーマの話をよく聴いていたので）今度は自分がラーマを助ける番であると思っ

た。それでジャターユもサムパティも両方とも驚の仲間であったので、彼らは非常に遠い所まではっきりと見わたすことができた。サムパティは何処にシーターが座っているのかを見わたすことができた。感謝を示すために他者を助けることは、ラーマヤナの中でとても大切な側面になっている。」

ババ様の御言葉

ラーマは、人間が主人として、夫として、息子として、兄弟として、友人として、あるいは敵対者としても生きていけるようになるために育まなければならない美徳（ダルマ）の、最高の模範です。

1966年3月23日

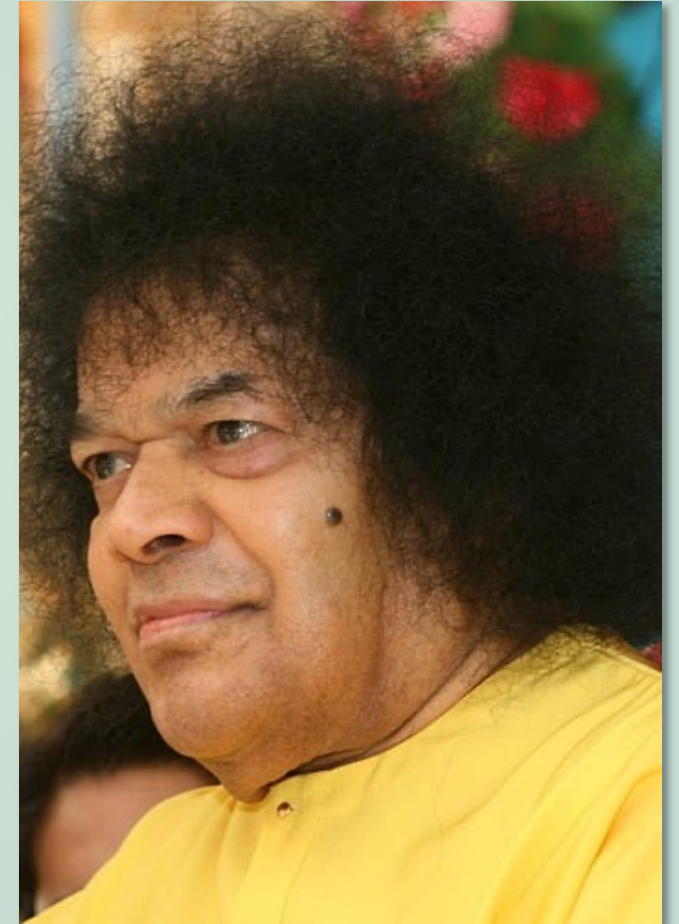
- ※1 ラーマ：トレーターユガにおける神の化身、美徳と正しい行いにおける最高の模範。
- ※2 スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。
- ※3 ハヌマーン『ラーマヤナ』に登場する猿。ラーマを深く信愛し献身をささげた。
- ※4 ラーヴァナ：『ラーマヤナ』に出てくるランカーの羅刹（悪鬼）の王。
- ※5 バガヴァットギター：インドの大叙事詩『マハーバーラタ』の中の詩。マハーバーラ

タの戦いの前にマヤーによって戦う意気を失ったアルジュナにクリシュナが説いた御教え。

- ※6 アルジュナ：『マハーバーラタ』の主人公とも言える英雄。パーンダヴァ兄弟の三男。
- ※7 スグリーヴァ：ラーマヤナに登場する猿王。
- ※8 ジャターユ：『ラーマヤナ』に登場する年老いた禿鷲（はげわし）、ヴィシュヌ神の乗り物である聖鳥ガルダの子といわれる。ラーヴァナがシーターを連れ去ろうとしたとき、衰えた身であるにもかかわらずシーターを守ろうとして戦うが、ラーヴァナに倒された。ラーマはジャターユの頭を膝に載せ、自らの手で死に水を飲ませた。ジャターユはラーマの御名を口にしつつ息を引き取り、ラーマそのなきがら亡骸をとむら申った。
- ※9 シーター：トレーターユガの神の化身ラーマ王子の妃、妻としての理想のダルマを世に示した。
- ※10 ヴィシュワミトラ：元は王だったが、聖仙ヴァシシュタへの嫉妬心と敵対意識からヴァシシュタを凌ぐ霊力を得るために激しい苦行を重ねてラージャリシとなり、その後ブラフマリシとなった七大聖仙のうちの一人。人類にガーヤトリーマントラをも

たらした。

- ※11 ランカー：『ラーマヤナ』の悪鬼ラーヴァナの王国。



Love Is My Form
Truth Is My Breath
Bliss Is My Food
My Life Is My Message
Expansion Is My Life
No Reason For Love
No Season For Love
No Birth No Death
Prema Sathya Ananda
Dharma Shanthi Ananda
Shirdi Sai Sathya Sai
Prema Sai Jai Jai
Shirdi Baba Sathya Baba
Prema Baba Jai Jai



Jai Sai Ram